

# 北東北の旅 2022



2022 年 10 月

旅のチカラ研究所 植木圭二

紅葉真っ盛りの東北地方の北 3 県（青森、秋田、岩手）を「男女 7 人秋物語」と称して旅仲間と巡ってきた。紅葉をはじめとした絶景、温泉、グルメ、この地方の歴史や精神文化を感じることもできた。そして今回の旅行記は企画段階からまとめた。

## 第一章 助走期間

### ■旅のきっかけ

私は今回一緒に旅する仲間と過去に何回か旅をしている。この春も伊豆箱根や茨城県を旅した。そしてそろそろ海外旅行に行きたいとか、国内なら東北かな、などと話をしていた。

その仲間とは、6 年前の 106 日間の地球一周の船旅で知り合い、船内で毎日飲んでいた同世代のおっさんたちだ。ヨコさんは船内では水彩画教室に入っていたカメラ好きのヨットマン、ヒデさんは船内では英会話教室に入っていたゴルフ好きでその腕前はプロ級だ。ヨシさんは船内ではフラダンスを習っていた山男で帰国後マッターホルンに登り日本国内をバイクで旅をしながら山に登っている。

3 人とも関西在住で、あえて説明することもないが全員お酒大好きの楽しい連中だ。

6 月のある日、ヨコさんから海外旅行は当分無理なので、秋は東北に温泉旅行にでも出かけようかと提案がある。そして、あっという間に 10 月の東北行きが決まった。

7 月の初め、私は東北旅行の骨子を作成して彼らに送った。

コンセプトは「北東北 3 県を温泉、紅葉、世界遺産で満喫し、その真価を探る」とし、夜行のフェリーで秋田まで行き北東北 3 県を概ね時計回りに巡って、温泉宿泊地をいくつか候補にあげて世界遺産とグルメも入れた。

10 月のこの時季は紅葉が見頃で、千人風呂で有名な青森県の酸ヶ湯温泉、その近くのランプの宿の青荷温泉は予約が取れないだろうと見切り発車で予約を入れる。案の定、既に酸ヶ湯温泉はほとんど空いていない。それでも何とか空きを見つけて 4 人分予約する。

## ■リモート会議

7月23日私が送った骨子をたたき台にリモート会議を開きさらに計画を詰める。

誰かが仙台まで飛行機で行ってレンタカーで巡ったという提案をしてくる。東北の北3県は多くの人はその広さのイメージがないらしく、私はその3県で九州と同じ位の大きさだと説明し、仙台に行くというのは九州旅行をするのに広島空港に降りるようなものだと言明すると初めて広さを認識したようだ。

### PB飲み友2022年秋の東北旅行 企画案の骨子

2022.7.7 植木 記

コンセプトは「北東北3県を温泉、紅葉、世界遺産で満喫し、真価を探る」

交通手段：敦賀からフェリーで秋田へ行き、車で1週間くらいかけて北東北を巡ります。  
費用はひとり当たり約3万5千円、2割引きの秋旅キャンペーンを利用します。  
飛行機&レンタカーでも同程度もしくはこれより高くなり、多少時間はかかりますが荷物をたくさん持ち込め、何よりも2段ベッド4人部屋はピースポットを感じます。  
そのため植木も関西で合流し、最初から参加します。

ルート：北東北3県を概ね時計回りでまわる予定です。

紅葉：この時季の東北はどこでも紅葉の見頃なので、温泉や観光地巡りでパッチリ見られます

温泉：今のところ候補の温泉&宿泊地は以下の通りです。その他検討中  
★不老死温泉 青森の日本海沿岸、海岸の露天風呂は有名  
★青荷温泉 青森黒石市のランプの宿、ランプしかありませんが、ビールは冷えてます  
★酸ヶ湯温泉 混浴の千人風呂、調べたら空気がほとんどありませんが、是非泊まりたい  
★星野リゾート奥入瀬渓流ホテル 2万円以上しますが、滅多にないのでいいかも  
★乳頭温泉郷の鶴の湯 こも有名で、若い女の子に大人気

世界遺産：東北3県には世界遺産が4つ、日本で最初に登録された白神山地、金色堂で有名な平泉、釜石の橋野鉄鉱山の高炉跡、昨年登録の縄文文化遺跡群(三内丸山や環状列石など)。白神山地は私が唯一行ったことがない遺産です。

グルメ：新鮮な魚貝類はもちろん、三大うどんの稲庭うどん、三大蕎麦のわんこそばもあります。

【7月初めに送った企画の骨子】

リモート会議開催を急いだ理由は東北地方にはLCC（格安航空会社）が飛んでおらず、JALの場合は伊丹空港から青森空港まで75日前の予約で約1万円という格安のチケットがあるからで、会議中にヒデさんが3人分を予約した。青森空港と新幹線の新青森駅は近いので、私はそれに合わせて新幹線で行けば良いはずだ。

そして皆に行きたい場所をそれぞれに聞いていく。

ヒデさんは青森県が初めて、いや青森県は日本全国で唯一行っていない県なのでどこでもいいと言っている。それでも下北半島、津軽半島には是非行きたいとも言っている。

ヨコさんは写真が趣味なので、紅葉の奥入瀬渓流と八幡平、そして平泉の中尊寺が初めてなので見たいと言っている。

ヨシさんは山登りが趣味なので、栗駒山や八甲田山、そして恐山を口にしていく。

私は日本にある世界遺産で、ただ1つ行っていない白神山地に是非行きたいと伝える。

温泉については、私と妻がこの7月に行った東北の秘湯巡りの旅行記を事前に読んでもらっており、その中の有名な乳頭温泉郷、強烈な泉質の玉川温泉などの名前があがる。

これから先は優先順位をつけてコース選定に合わせて宿を決めて行くことになる。皆の意見では「植木さんが泊まったことがない宿を優先していいよ」と言ってくれる。それならば「星野リゾート奥入瀬渓流ホテルは泊まったことがないので、高いけれど一点豪華主義で面白そうだよ」と言うと、「それもいいね、星野リゾート泊まったことがないからな」と意見が一致する。

私は骨子に沿って優先順位と移動距離を考慮して一筆書きになるようにコースを決めて宿を予約するのだが、この作業に1週間程度かかった。

この時季の星野リゾート奥入瀬溪流ホテルは 2 連泊を条件にしている。その理由も察しがつくが、費用のこともあり、そこに縛られては他が楽しめないで諦めることにした。

7 月末に宿の予約もほぼ終わり、その行程案を皆に送信する。

| 月日                | 行程                                                                                       | 宿                                                                   | 宿泊費など                                | 月日                | 行程                                                                  | 宿                                                     | 宿泊費など                   |
|-------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|--------------------------------------|-------------------|---------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------|-------------------------|
| 10月<br>11日<br>(火) | 東京→新青森駅12:34着、<br>青森駅前でレンタカーを借り、<br>伊丹→青森空港13:05着、<br>関西組をピックアップし、三内丸山遺跡見学して宿へ110km(2時間) | 黄金崎不老死温泉<br>青森県西津軽郡深浦町大字新<br>作字下清滝15<br>電話0173-74-3500              | 12110円<br>夕陽の沈む日本<br>海と同じ目線の<br>露天風呂 | 10月<br>17日<br>(月) | 宿から八幡平経由で次の宿まで<br>200km(3時間20分)、<br>世界遺産の秋田環状列石、八幡平周<br>辺で立ち寄り湯     | 玉川温泉<br>秋田県仙北市田沢湖玉川黒<br>沢<br>電話0187-58-3000           | 10360円<br>日本一強酸性の<br>温泉 |
| 12日<br>(水)        | 宿から世界遺産の白神山地<br>62km(1時間40分)、2時間散策<br>白神山地から龍飛峠経由して宿へ<br>126km(3時間)                      | 龍飛旅館<br>青森県東津軽郡外ヶ浜町字三<br>蔵中浜110 電話0174-37-2666                      | 8800円<br>青森ヒバの風呂<br>近くに義経寺           | 18日<br>(火)        | 宿から次の宿まで近い(50km)ので<br>途中で田沢湖湖畔散策や乳頭温泉<br>郷の鶴の湯立ち寄り湯、昼食は稲庭<br>うどん    | 乳頭温泉郷 蟹場温泉<br>秋田県仙北市 田沢湖田沢先達<br>沢国有林 電話0187-46-2021   | 13200円<br>8畳2間          |
| 13日<br>(木)        | 宿から青森市経由で恐山<br>176km(3時間40分)<br>現在、途中の見どころを検討中                                           | 恐山温泉 宿坊吉祥閣<br>青森県むつ市田名部字曾利山3<br>-2 電話0175-22-3825                   | 12000円現金<br>精進料理、朝の<br>おつとめ有         | 19日<br>(水)        | 宿から130km(2時間30分)なので盛<br>岡市内でわんこそばの昼食<br>時間があれば世界遺産の釜石の橋<br>野鉄鉱山の高炉跡 | 夏油温泉 元湯夏油<br>岩手県北上市和賀町岩崎新田1<br>-22 電話090-5834-5151    | 12100円                  |
| 14日<br>(金)        | 下北半島の名所を回ります。<br>仏ヶ浦、栗研温泉、大間岬など<br>150km<br>現在、途中の見どころを検討中                               | おおま温泉 海峡保養センター<br>〒039-4601 青森県下北郡大間<br>町大間内山48-1<br>電話0175-37-4334 | 13360円<br>大間のマクロと大<br>間牛のすき焼き<br>コース | 20日<br>(木)        | 宿から次の宿まで100km、途中で世<br>界遺産平泉見物、早く宿に着けば栗<br>駒山登山を検討中                  | 須川高原温泉<br>岩手県一関市厳美町祭時山国<br>有林46 林班ト<br>電話0191-23-9337 | 12430円                  |
| 15日<br>(土)        | 宿から六ヶ所村経由で奥入瀬溪流<br>そして次の宿まで230km(7時間)                                                    | ランプの宿 青荷温泉<br>青森県黒石市沖浦青荷澤滝ノ<br>上1-7 電話0172-54-8588                  | 12650円<br>ランプの宿<br>青森ヒバの香り           | 21日<br>(金)        | 宿から青森空港まで300km(4時間)<br>なので朝8時に宿を出ます。<br>空港から新青森駅へ行きレンタカー<br>返却      |                                                       |                         |
| 16日<br>(日)        | 宿から次の宿まで31km<br>前日の奥入瀬溪流が歩けなければ<br>再度挑戦、十和田湖遊覧など                                         | 酸ヶ湯温泉旅館<br>青森県青森市荒川南荒川山 国<br>有林酸湯沢50番地<br>電話017-738-6400            | 10340円<br>混浴千人風呂                     |                   | レンタカーの移動距離の合計は<br>1700kmくらい                                         |                                                       | 宿泊費の<br>合計106450円       |

## 【7 月 31 日作成の行程表】

### ■メンバー増加

実はこの仲間以外から「植木さんが企画する旅行があれば誘って欲しい」という人が数人おり、いつも同じメンバーで行くよりも面白くなりそうなので 4 人の同意を得てその数人に声を掛ける。

8 月 7 日、その数人に行程案を送信すると、3 人の女性が手を挙げてきた。そのうち 2 人は全行程一緒に行きたいといい、あとの 1 人は別件があって前半の 5 日間を指定してきた。

その 2 人とはキキちゃんとミッチャン、この春に草津温泉と四万温泉に行った仲間だ。(詳しくは旅行記「草津・四万温泉の旅 2022」参照)

キキちゃんはテレビのレポーターや結婚式の司会をやって、ビルを建てて 2 人の子供を育てたという。自然で旬な食材を使う料理に造詣が深い彼女は自前のビルで洒落た料理屋を開いている。

ミッチャンは若い頃スウェーデンからインドまでヒッチハイクで一人旅をした。彼女は「私は小田実(まこと)の影響を受けました」と言っている。小田実は 1958 年に持参金 200 ドルで世界一周旅行に出かけ、体験記「何でも見てやろう」がベストセラーになった。

あとの 1 人はチーちゃん、私の高校時代のサークル仲間です。旅好き、芸術好き、地域活動にも熱心なアクティブ・レディだ。(旅行記「千葉ローカル線の旅 2022」参照)

女性が 3 人増えて、宿の追加予約をすることになる。問題は先行予約した酸ヶ湯温泉と青荷温泉で、空きがあっても私たちと同日でないと別行動になる。苦肉の策として男性陣が泊まる宿の近くに女性陣の宿を取ることにし、たまたま青荷温泉は酸ヶ湯温泉に泊まる日に空いていた。あとは十和田湖周辺の宿を探す、なかなかいい宿がない。あっても満室か、非常に高い。やはりこの時季の東北は紅葉目当ての観光客が殺到するからだろう。

それでも小さな宿まで調べていくと、十和田湖のヒメマスを出してくれる漁師宿というのを見つける。インターネットの予約はやっていないので直ぐに電話をかけて交渉すると、何とか泊めてくれそうだ。常連客が多い宿らしく、狭い部屋でもいいかと聞かれて即座に了承した。しかしまだ予約を受け付けていない時期なので、もう一度予約の電話を入れることになった。

## ■リコンファーム（Reconfirmation）

10月初め、予約を入れてある宿に次々電話して予約確認をとる。昔は海外旅行などで飛行機やホテルの予約は事前確認が必須で、リコンファーム（Reconfirmation）と呼んでいたことを思い出す。旅行参加人数が少なければそこまではしないが、7人それも女性もいるので宿の確保は重要だ。

実は最近、私の友人が予約した宿に行ったが、宿は休業日だったというトラブルを聞いた。理由はインターネットで予約したつもりでいたが、実は予約されていなかった。その時は男4人だけで、しかも平日なので急遽別の宿に泊まって事なきを得たという。

時期は前後するが、その3週間程前に観光庁が全国旅行支援制度を実施するというニュースが飛び込んで来た。それも運よく私たちの旅が始まる10月11日からだ。

リコンファームと同時に全国旅行支援の利用を確認すると11軒の宿の内、2軒はその支援制度が使えないという回答だ。1軒は恐山の宿坊でそもそも支援制度とは無縁の施設で、もう1軒は煩雑なので対応しないと言い切っている。

都道府県によっても宿によっても差がある。10月11日以降の予約でないといけないとか、確認後折り返し連絡するとか、行政から何も通知がないが何とかするという宿もあった。

| PB飲み友2022年秋の東北旅行計画Vol.4              |                                                                                                                                                                                                                                       | 2022.10.4 植木 記 |
|--------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------|
| コンセプトは「北東北3県の温泉、紅葉、世界遺産を満喫し、その真価を探る」 |                                                                                                                                                                                                                                       |                |
| 日程： 2022年10月11日(火)～10月21日(金)の10泊11日  |                                                                                                                                                                                                                                       |                |
| 参加者：                                 | 男性陣はピースポート仲間の関西組ヒデさん、ヨコさん、ヨシさん、そして神奈川の植木です。女性陣はピースポート仲間仲間関山のキキちゃん、東京の片岡さんミツちゃん、そして植木の高校時代のサークル仲間の神奈川のチーちゃんです。男性陣は最初から最後までですが、チーちゃんは初日～15日まで、他女性2名は宿の手配の都合で途中2日間は別の宿に泊まります。                                                            |                |
| 交通手段：                                | 新青森でレンタカーを借りて以降レンタカーで北東北3県を巡り、最終日に同所へ返却。レンタカーは、オリックスレンタカー新青森駅前店はます店017-752-6543、期間は10月11日13時～10月21日13時、Wアカラス(ワゴン)8人乗り、税込92070円                                                                                                        |                |
| 持ち物：                                 | 全国旅行支援の適用を受けるため3回4回のコロナワクチン接種証明のコピーと健康保険証など身分証明を持参ください。また2～3時間の散策、ハイキングを2カ所計画しており、本格的な装備は必要ありませんが、歩きやすい靴(運動靴かスニーカー)が良いでしょう。それからレンタカーはヴォクシー、ステップワゴンクラスなので、7人乗車時には荷量はかなり手狭になります。あくまでも無理の無い範囲で結構ですので荷物は必要最小限をお願いします。(とはいっても必要なものは持参ください) |                |
| 費用：                                  | 10泊の2食付き宿泊費は1人当たり約11万6千円です。交通費としてはレンタカー9万円、ガソリン代と高速料金が約5万円で、1人当たりでは約2万円になります。昼食・夜の酒代として入場料などで1日1人3千円として3万3千円になります。従って全て込みの費用は、概算で1人当たり17万円を見込んでおり、参加日数により案分しましょう。その他に青森までの交通費が別途必要になります。                                              |                |

| 月日        | 行程                                                                                                                             | 宿                                                                                     | 宿泊費など                                  |
|-----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------|
| 10月11日(火) | 関東組は東京→新青森駅12:34着、新青森駅前レンタカーを借ります。関西組は伊丹→青森空港13:05着、関東組と合流し、三内丸山遺跡見学して宿まで110km(2時間)走ります。昼食は各自食べて来てください。途中で北金ヶ沢の大イチョウ、千疊敷、大岩を見物 | 黄金崎不老不死温泉<br>青森県西津軽郡深浦町大字駒作字下清達15<br>電話0173-74-3500<br>男4人、女3人泊<br>夕陽の沈む日本海と同じ目線の露天風呂 | 12110円<br>女性3人部屋で約千円増<br>※旅行支援適用       |
| 12日(水)    | 世界遺産の白神山地へ62km(1時間40分)、ブナ林を2時間散策し、龍泉峯へ126km(3時間)、途中で弘前城に隣接する津軽藩ねぶた村(0172-39-1511)を見学し昼食です。斜陽館、セツ庵、徒歩国道339号にも立ち寄ります。            | 龍飛旅館<br>青森県東津軽郡外ヶ浜町字三瓶中浜110<br>電話0174-37-2666<br>男4人、女3人泊                             | 8800円<br>青森ヒバの風呂は期待大、近くに善経寺<br>※旅行支援適用 |
| 13日(木)    | 宿から陸奥湾に沿って下北半島へ200km(4時間)を走行します。途中で善経寺、青森駅近くのねぶたの家ワラッセ(0177-52-1311)見学、夏泊半島の先端の食堂浜千鳥(0177-59-2448)で昼食です。                       | おおま温泉 海峡保養センター<br>青森県下北郡大間町大間内山4-8-1 電話0175-37-4334<br>男4人、女3人泊、大間マクロと大間牛のすき焼き食べ比べコース | 12150円<br>※旅行支援適用のために11日再予約の電話必要       |
| 14日(金)    | 下北半島を回ります(150km)。大間峠、大畑八幡宮、景勝地の仏ヶ浦、河童の湯で有名な薬研温泉、恐山、むつ科学技術館、そして昼食は磯っ子食堂(0175-44-3430)で、うに丼など。                                   | 恐山温泉 宿坊吉祥閣<br>青森県むつ市田名部字曾利山3-2 電話0175-22-3825<br>男4人、女3人泊 精進料理、朝6時から動行、部屋では酒OK        | 12000円現金のみ、<br>※旅館ではないので旅行支援は適用なし      |

| 月日     | 行程                                                                                                                                                 | 宿                                                                                                                                    | 宿泊費など                                                                     |
|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|
| 15日(土) | 時間が許せば弥次郎六、六ヶ所村原燃PRセンターなど立ち寄り、奥入瀬渓流まで150km走ります。途中で木原さんと別れて、ここから6人旅です。奥入瀬渓流はバスと徒歩で散策します。女性と男性は別の宿に泊まるので、先に女性を宿で降ろします。奥入瀬渓流から男性宿の青荷温泉まで50km          | ランブの宿 青荷温泉(男性泊)<br>青森県黒石市沖浦青荷澤滝ノ上1-7 電話0172-54-8588<br>大雨で風呂2つ使用できず<br>民宿春山荘(女性泊)<br>青森県十和田市大字奥瀬字十和田湖畔休屋5-1 電話0176-75-2607 ※末田さん名で予約 | 12650円※旅行支援適用はキャンセル再予約必要で、適用見送り<br>6750円、ヒメマス料理で人気宿、曲ブランドオトル要<br>※旅行支援適用  |
| 16日(日) | 男性が泊まった青荷温泉から女性宿の春山荘まで40kmを走って朝9時30分に迎えに行きます。十和田湖遊覧船乗船予定ですが、前日の奥入瀬渓流が歩けなければ再挑戦します。道の駅「虹の湖」に女性が泊まる青荷温泉から送迎バスが15時に来るので間に合うように行き、その後女性宿に行きます。60km走行予定 | 酸ヶ湯温泉旅館(男性泊)<br>青森県青森市荒川南荒川山 国有林酸湯沢50番地<br>電話017-738-6400<br>ランブの宿 青荷温泉(女性泊)<br>青森県黒石市沖浦青荷澤滝ノ上1-7 電話0172-54-8588                     | 10340円<br>※旅行支援適用予定だが、現状何も情報無し<br>12650円<br>植木で予約(代表キキちゃん)<br>※旅行支援適用は見送り |
| 17日(月) | 青荷温泉発8時30分の宿のバスに女性が乗り、9時には虹の湖でピックアップします。八幡平経由で宿まで130km。途中世界遺産の秋田環状列石見学し、八幡平周辺で立ち寄り湯(後生掛温泉、ふけの湯、藤七温泉のどれか)                                           | 玉川温泉<br>秋田県仙北市田沢湖玉川洗黒沢 電話0187-58-3000<br>男4人、女2人予約<br>日本一強酸性の温泉(現代医療が開放した人が最後に頼る温泉)                                                  | 10710円<br>バスタオルなし<br>※旅行支援適用                                              |

| 月日     | 行程                                                                                                                   | 宿                                                              | 宿泊費など                                 |
|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------|---------------------------------------|
| 18日(火) | 乳頭温泉郷まで50km。周辺散策して、田沢湖畔の田沢湖共栄バース(0187-43-0701)で稲庭うどんを食べ、乳頭温泉郷の饅頭の湯で立ち寄り湯                                             | 乳頭温泉郷 登場温泉<br>秋田県仙北市 田沢湖田沢先達沢国有林 電話0187-46-2021<br>男4人、女2人予約   | 13200円<br>8畳3室、髭剃り無し<br>※旅行支援適用       |
| 19日(水) | 夏泊温泉まで130km(2時間30分)、乳頭温泉郷黒湯(9時～)で立ち寄り湯、盛岡の東屋大手先店(019-623-7540)で、わんこそばを食べます(11時30分～予約済)。時間があれば世界遺産の釜石の橋野鉄鉱山の鉱炉跡に行きます。 | 夏泊温泉 元湯夏泊<br>岩手県北上市和賀町岩崎新田1-22 電話090-5834-5151<br>男4人、女2人予約    | 12100円<br>たくさん露天風呂がある宿<br>※旅行支援は適用されず |
| 20日(木) | 次の宿まで約100km。朝8時に出て世界遺産平泉を見物し、11時頃に宿に着けばコースタイム往復5Hの栗駒山登山が可能になります。昼食はコンビニで買い込みトレッキングします。                               | 須川高原温泉<br>岩手県一関市厳美町祭時山国有林46 林班ト<br>電話0191-23-9337<br>男4人、女2人予約 | 4人部屋12430円<br>2人部屋13530円<br>※旅行支援適用   |
| 21日(金) | 青森空港まで300km(4時間)なので朝8時に宿を出ます。関西組は13時40分発の伊丹行きに乗り、新青森駅へ行きレンタカー返却です。昼食は別れてから各自とってください。                                 | レンタカーの移動距離の合計は約1700km                                          | 宿泊費の合計116140円                         |

【10月4日作成 最終の行程表】

## 第二章 津軽と下北

### ■男女7人秋物語の旅が始まる

私とミッチちゃん、チーちゃんの関東組3人は新青森駅で新幹線を降りレンタカーを借りて、おっさんたち3人とキキちゃんの関西組4人が到着する青森空港に迎えに行く。そして合流してよいよ男女7人秋物語の旅が始まる。

男性陣と、女性陣のキキちゃんとミッチちゃん、そしてチーちゃんはそれぞれ私を介した参加なので基本的には初対面だ。しかし車内では既に和気あいあいとした雰囲気になっている。これが“旅のチカラ”というものだろう。



【男女7人秋物語のメンバーとレンタカー】

### ■三内丸山遺跡

最初の訪問地は青森空港に近い「三内丸山遺跡」で、ここは世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産のひとつになっている。

私の旅行記録を調べてみると、1994年の夏に私は家族とこの遺跡を訪れている。しかし既に30年近い時間が経過しておりほとんど覚えていない。当時の私は38才、縄文遺跡に興味がなかったのか、妻と幼い子供2人を連れて無我夢中だったのかもしれない。

広い敷地に入ると、皆はいつせいに走り出す。若者たち、いや昔の若者たちが一斉に堰を切ったように広い野原に駆け抜ける様子は見ていても気持ちがいい。もちろん私もそのひとりで、まるで高校生か大学生のような気分になっている。男女7人秋物語とは良く言ったもので、実面的表現だ。

縄文人たちが「君たちはまだまだ若いね、羨ましいよ」と言っているように感じる。

復元された大きな住居の隣に巨大な 6 つの柱の櫓（やぐら）がある。これは多分こんなものがあったのだろうと現代人が想像して造ったのかと思いがちだが、実はこの櫓の近くにドームがあって、そのドームの中には櫓の柱が立っていたという大きな 6 つの穴がある。



【三内丸山遺跡の主要部分 左のドームに 6 つの穴、中央が復元した櫓、右は復元した住居】

穴は直径約 2m、深さ約 2m、間隔約 4.2m というもので、発掘した時には穴の中には直径約 1m の栗の木の柱があったという。これを縄文人が重機も使わず掘ったのかと、一同驚いている。

縄文時代は紀元前 1 万 3 千年頃から紀元前 4 百年頃までで、その前は旧石器時代、その後は弥生時代になる。縄文時代は石器から土器と弓矢の使用により定住化が始まり、堅穴住居の普及、環状集落等が形成された。弥生時代になると稲作と金属器の文化に移行するという時代区分になっている。



【ドームの中 発掘された 6 つの大きな柱の穴】

三内丸山遺跡などが世界遺産に登録された推薦文を抜粋して紹介する。

この遺跡群は農耕社会以前の生活の在り方と精神性を示す 17 の遺跡から構成されている。北海道南部及び東北地域に所在し、狩猟・漁労・採集社会による定住の開始、発展、成熟を示している。この地域は豊富な堅果類を特徴とする落葉広葉樹林や、暖流と寒流が交差することによる理想的な漁労条件等、豊かな森林・水産資源に恵まれた。縄文人は 1 万年以上にわたって農耕社会に移行することなく、環境の変化に適応しながら狩猟・漁労・採集を基盤とした生活を継続した。土器を使用し、居住地や祭祀場を形成し、複雑な精神文化を発展させていた。墓を作り、祭祀のための盛土、環状列石を創造し、社会的つながりもあった。

登録理由は「文明の証拠」と「伝統的集落や人類と環境との交流」となっている。

自然と共存しながら定住生活を送り、独自の生活スタイルによって豊かな精神文化が育まれた。現代では想像もできないことかもしれないが、東北の北部は当時の最先端の地域だった。

#### ■不老ふ死温泉

青森県の日本海側に黄金岬（こがねさき）があり、そこに「黄金崎不老ふ死温泉」という一軒宿がある。この宿は日本海に沈む夕日を、海面よりも少しだけ高い露天風呂から見る事ができる。温泉は茶褐色で、夕日に映えると黄金色になるという露天風呂が売りの宿だ。

私は 30 年くらい前にこの宿に泊まってその露天風呂に入ったことがあり、今回も是非入りたいと思っていたが、強風のために波が露天風呂に入り込むので入浴禁止になっている。高台にある宿には内湯と露天風呂があり、温泉そのものは浸かることができたが、あのダイナミックな海岸の露天風呂体験ができなかったことは残念でしょうがない。



【海岸の露天風呂 宿の HP より】

しかし捨てる神あれば拾う神あり、ここは海辺の宿なので食事が美味しい。今回はビュッフェ・スタイルの食事を選んだので郷土料理や大間の本マグロやサザエ、そしてイクラなど海の幸が並んでいる。もちろん食べ放題だからイクラはご飯に山盛りいっぱいかけてイクラ丼にした。

初日からこのご馳走に、皆は興奮を隠せず「これは凄い」を連発している。



【波のために入れなかった露天風呂全景】



【食べ放題のイクラ丼】

#### ■世界遺産の径 ブナ林散策道

1976 年世界遺産条約が締結され、1978 年に世界で 12 件の世界遺産が登録された。日本はそれからかなり遅れて 1993 年に白神山地を含め 4 件が世界遺産に登録された。同時に登録された世界遺産は姫路城、法隆寺、屋久島だから、その真価は理解できる。そして白神山地は日本にある世界遺産 25 件の中で、私が唯一訪れたことがない。今回ここだけは行きたいという場所だ。

世界遺産には文化遺産と自然遺産があって、自然遺産の場合には遺産の自然環境保護のためにコアエリア（核心地帯）とその周辺にバッファエリア（緩衝地帯）が設定される。白神山地のコアエリアに入るには入山許可が必要で、今回散策する「世界遺産の径 ブナ林散策道」はコアエリアではなくバッファエリアだが、それはもはや良としないといけない。

白神山地のアクアグリーンビレッジに車を停めて、ブナ林散策道を歩きはじめる。標高約 230m の低地なので紅葉はまだ早いが、約 1 時間の散策は世界遺産の力なのか皆ルンルン気分で歩いている。



【ブナ林散策道の入口の世界遺産のオブジェ】

白神山地が世界遺産に登録された理由を、私が世界遺産検定 1 級を受験する際に勉強したテキストで紹介する。

日本固有種のブナの純林が原始性の高い状態であり、ブナ林の生態系が進行中のプロセスを示す地になっている。日本では極相林（成長しきった森林）であるブナ林だが、白神山地は人里離れていることと急峻なために手つかずの原始林が残っている。年間 1.3mm という極めて速いペースで土地が隆起しており、昔海底だったので崩落を繰り返し複雑で急峻な地形を形成した。ブナの純林は日本やヨーロッパに分布しているが、日本付近は全て氷河に覆われることがなかったのが氷河後の回復が早く 1 万年程前に今の分布になり、ヨーロッパでは大半がツンドラ地帯になったので 2000 年程前に今の分布になった。従って日本のブナ林はヨーロッパに比べて 5 倍ほど植生が多様になっている。氷河から逃れたために種の保存がなされ多年草アオモリマンテンナなどの固有種があり、動物もクマゲラ、日本カモシカ、イヌワシなど多種生息している。

私たちは世界遺産のブナ林を歩き終えて、管理人がいる山小屋の前で食事にする。食事と言ってもここに来る途中の道の駅で買った軽食と大きなリンゴだ。

あまりに大きなリンゴなので分けて食べることになるが、残念ながらナイフは持ち合わせていない。仕方ないので女性陣が手で割ろうとするが、女性の力ではなかなか割れない。そこでおそらくこのメンバーの中で一番力持ちのヨコさんが「ちょっと貸して」と言ってみ事に割った。さすがヨットマン、洋上では何でもやらないといけない。

## ■国道 339 号線

国道 339 号線は青森県弘前市から津軽平野を北上して津軽半島の竜飛岬手前を回り外ヶ浜町まで約 128km を結んでいる。この国道の最高地点（標高 475m）の「眺瞰台（ちょうかんだい）」に立ち寄る。ここからは竜飛岬を上から一望でき、北海道も大きく見える。そしてちょうどこの海底の真下を青函トンネルが通っている。



【眺瞰台から見る竜飛岬、その先は北海道の松前付近】

国道 339 号線で竜飛岬の灯台の手前まで行くと石碑がある。石碑には「津軽海峡冬景色」の歌詞が刻まれており、石碑の前に赤い押しボタンがある。ヨコさんがそのボタンを押すと津軽海峡冬景色の歌が流れ始める。

旅の解放感か、雄大な竜飛岬の魅力か、何を思ったのか、歌に合わせて女性陣が歌い始める。お世辞にも上手いとは言い難い“鬼のようなコーラス”が竜飛岬にこだまする。男性陣は仲間でないようなそしらぬ顔をしながらそそくさと石碑の前から退散する。

国道 339 号線は、実はここからが面白い。竜飛岬付近があまりの急こう配で土地も狭く、車道が通せない。そのために日本で唯一の歩道それも階段という非常に珍しい国道になった。

その階段国道を徒歩で降りる。

そうは言っても車があるので、私が車を運転して少し遠回りの別ルートで階段国道の下まで乗って行き、そこで皆をピックアップする。

階段は 362 段あったと、ヒデさんが数えながら降りて教えてくれた。339 段にすれば良かったのにと彼は付け足したが、それは無理な話で、先に階段が出来て後に国道に指定された。

階段国道の下で海を眺めていると“日の入り”の時間が近づいてくる。本日は晴れていて雲ひとつない。誰からともなく「夕日が綺麗だろうね」という言葉が発せられる。その言葉に反応した私はサービス精神旺盛な運転手と化して、皆を乗せて再び車で階段国道上の駐車場に戻った。

竜飛岬から夕日を見る。それは絶景だ。

メンバーたちは、はしゃぎまくっている。ハートの形をつくった手の中に夕日を入れる撮影など、まるで青春ドラマのワンシーンのようだ。



【ハートの形にした手の中の夕日を撮る】



【日本海に沈む夕日】

## ■龍飛旅館

竜飛岬で日本海に沈む夕日を見て、今宵の宿は近くの「龍飛旅館」だ。ここはツーリングの若者たちに人気がありそうな宿で、直ぐ目の前が海だから私は料理を期待して予約した。

宿に着くと、おばあさんが1人で対応してくれる。驚いたことに部屋を5つ用意してあるという。コロナ対策で密を避けてのことらしいが、「これは凄い」と皆驚きの声をあげている。

チェックインの手続きをしているとどうも食い違いがある。私は7人で予約していたが、おばあさんは8人と聞いたと言っている。私は行程表を見せてリコンファームをしたことも伝えたが彼女も予約ノートを見せて8人と書いてあり譲らない。電話予約なので言った言わないで拉致があかない。

私はこのまま争うのも得策ではないと考えて、妥協点を探ることにした。

結局、夕食は1膳余計に用意したので1膳分3000円をこちらで持って、その3000円は全国旅行支援のクーポン券を使えるから持ち出しにはならない。宿泊費は7人分に落ち着いた。

しかし彼女は旅行支援の割引後の宿泊費を6000円と言ってくる。確か元は8800円だから4割引では5280円になるはずなのに解せない。少しでも補てんしようと考えてのことだろうが、私はそれ以上争う気にもならず、そのまま受け入れた。

部屋は5つと言っていたが、私たちとほぼ同時にチェックインした1人旅の〇〇さんという人がおり、その人のために1部屋空けて欲しいというので、結局は4部屋なる。どの部屋もそんなに広くなく定員1~2人部屋というところだろう。最初の驚きと喜びはスッと消えていく。

風呂は、女性陣は青森ヒバの湯、男性陣はユニットバスを使ってくれと言われる。私が「夕食は何時からですか？」と聞くと、6時からだという。時計を見るともう5時55分でとても風呂に入る時間はない。すぐに6時30分に変更してもらうが、男性の風呂は先に〇〇さんを入れてさせて欲しいと言っている。

結局それも受け入れて私とヒデさんが食前の15分間で風呂を済ませることにして、ヨシさんとヨコさんは食後に入ることになった。

ユニットバスは洗い場が1つ、浴槽は1人用で同時に2人は浸かれない。さらに浴槽は塗装がはがれてかなりみすぼらしい。私も多く旅をしていろいろな風呂に入ってきたが、この浴槽は明らかにワースト1だろう。

食事はというと、ここは漁港の近くなので地元で獲れたらしい地魚の刺身を真ん中に、鍋も天ぷらも焼き魚もあって決して悪くはない。しかし天ぷらは既に冷たくなっており、一連のこともあってテンションは下がっている。それでも宿の若い人がテキパキと対応してくれるのが救いかもしれない。

部屋に戻り、寒いので何か暖房器具をお願いすると「暖房費を取りますがいいですか？」と聞かれる。風邪をひくわけにもいかず、石油ヒータを頼む。昨今の燃料費高騰でこれは仕方ないことかもしれない。

そしてしばらくして一番広い私たちの2人用の部屋に集まり、飲み会が始まる。

話題はもちろんこの宿のことで盛り上がる、いや盛り下がるが正しいか。狭い急な階段は斜めになっていて滑り落ちそうとか、押し入れが崩れているとか、話題には事欠かない。

キキちゃんが「あのおばあさんに任せていてはダメなので、宿の若い人に『楽にしてあげて』と頼んでおいたよ」と言っている。それを聞いた男性陣が関西弁で「それじゃ、死んでしよう」と突っ込みを入れる。一同は大爆笑だ。

翌朝のチェックアウト時、金額を聞いて会計役のヨコさんがお金を払おうとするのだが、明細も領収書もない。全て口頭でのやり取りだ。せめて金額のメモくらい欲しいと頼むと、裏紙のメモ用紙だけ渡されて私が金額を書いた。

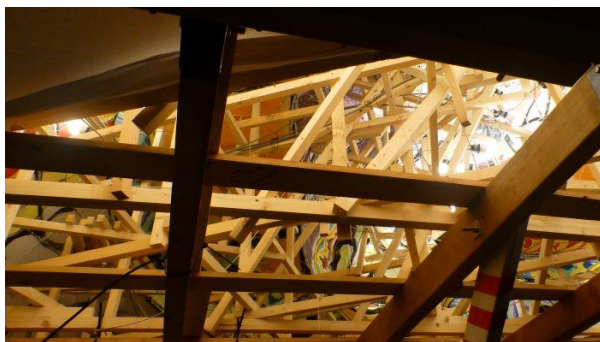
思い出尽きない強烈な宿だった。

## ■ねぶた

「ねぶた祭」は青森県、いや日本を代表する祭りだ。青森市の中心地の青森港に隣接したねぶた祭の記念館「ねぶたの家 ワ・ラッセ」を訪れる。

館内には今年の夏2年ぶりに開催された祭で実際に使用された“ねぶた”が展示されている。近くにいる女性スタッフをつかまえて根掘り葉掘り尋ねると、彼女は快く教えてくれる。

「これが最優秀賞を受賞したねぶた、あちらのねぶたは中身を見られます」と言いながら、案内してもらう。張りぼてのねぶたの中身を見るのは女性のスカートの中を覗くようなものだが、何だかワクワクするものでこんな機会は滅多にない。また隅の方にはねぶたを引く姿を写真に撮るためのねぶたまで用意してあって、全員が一致団結している引いている姿を撮ってもらう。



【ねぶたの中】



【ねぶたをひく男女7人秋物語のメンバー】

彼女の説明によるとねぶた祭の起源は七夕祭りの灯籠流しの変形で、奈良時代に中国から渡来した七夕祭と古来より津軽にあった精霊送りの行事が一体化したという。

その灯籠に近いのが弘前の“ねぶた”で、青森のものとは雰囲気も形も異なっている。

この地域は江戸時代までは日本の最北端で、蝦夷地（北海道）へ蝦夷征伐に出陣した。出陣を送り出すのが城下町の弘前のねぶたで「ヨーヨードウ、ヨーヨードウ」と勇猛な掛け声が特徴的だ。それに対して戻ってきた武士たちを迎い入れるのが港町の青森のねぶたで「ラッセラー、ラッセラー」とハネトが跳ねて景気よく騒いで勝利を祝う。

いわばこの 2 つの祭りはセットになっており、弘前ねぶたが展示されている津軽藩ねぶた村にも行きたかったが、今回は時間の都合で叶わなかった。

#### ■夏泊半島の佐々木食堂

青森県の日本海側が津軽半島、太平洋側が下北半島で、その 2 つの半島に挟まれた陸奥湾に夏泊半島がある。この半島はホタテの貝殻の形に似ているのとホタテの産地でも有名なので、半島を回る道路は「夏泊ホタテライン」と呼ばれている。

この半島の先端にある「佐々木食堂」の暖簾をくぐり中に入る。すると真ん中には古いテーブルが 4 つ、パイプ椅子も置かれており、いかにも昔ながらの食堂という感じが郷愁を誘う。

女将さんがいて、私が「お店やっていますか？」と聞くと、彼女は「やっていますが、時間かかりますよ」と言っている。壁には日に焼けた古いメニューが貼ってあり、あれこれ聞いた結果、イクラ生ホタテ丼、ホタテ塩ラーメン、生ホヤ、イカ焼き、そしてビールも注文する。

当たり前の話だがビールを頼む時にはこの後は誰が運転するか決めてからにしており、今回はヨシさんが運転する。申し訳ないが彼だけビールはお預けになる。そのやり取りを見ていた女性陣はその連携プレーに驚き感激している。男性陣は「何で感激するの？」と解せないが、男性がマメに動くことが珍しいらしい。私に言わせれば、酒の神様に生贄を 1 人差し出したに過ぎない。

女将さんが携帯電話で誰かを呼び出して、少しすると息子らしく若者が新鮮なホタテとホヤを持ってきた。次はオヤジさんがイカを持ってきて私たちの目の前で焼き始める。焼きあがったイカとホヤの刺身を肴にビールもすすむ。ホヤ初体験のキキちゃんは「これ美味しいね」と満足そうに食べている。やはり新鮮なホヤは美味しい。



【ホタテとホヤ】



【イクラ生ホタテ丼】

そしてメイン料理の登場だ。イクラ生ホタテ丼にはホタテが 3 つ、ホタテ塩ラーメンにはホタテ 5 つ使われている。味は、もちろん美味しい。もはやそれ以上の説明は不要だろう。

値段はイクラ生ホタテ丼が 1300 円、ホタテ塩ラーメンが 850 円、ホヤは 1 つ 600 円、イカ焼きは 1 杯 1000 円。ホヤとイカ焼きは 2 つずつ注文しシェアして食べた。

半島の先端に陸奥大島という無人島があつて橋が架かっている。食後の散歩で島に歩いて渡る。この島は神奈川県の江の島を一回り小さくしたようなサイズで、砂州で繋がっている。地元のおばさんと話をすると、夏になると孫を連れて海水浴に来ると言っていた。今も海水は綺麗で透き通っている。



【陸奥大島】

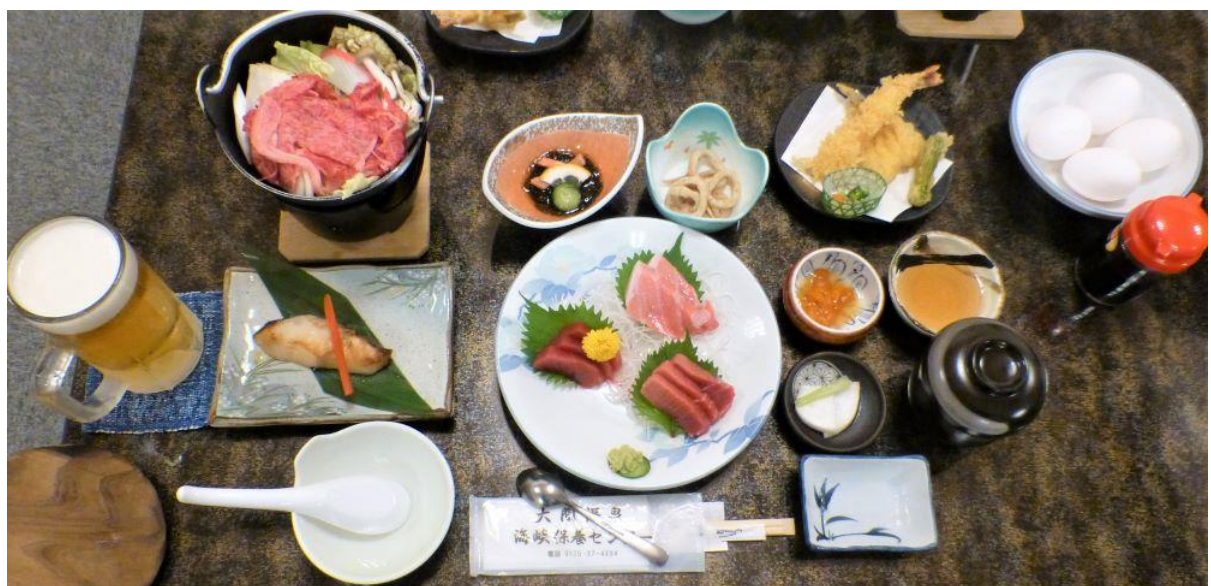
#### ■大間のマグロと大間牛

下北半島の大間町はマグロの一本釣りで有名で、本州最北端の大間岬がある。私たちが訪れた時は夕方、昨日の竜飛岬同様に夕日が綺麗だが、竜飛岬に比べて大間岬は低地で人家が多いのであまり雄大さは感じない。

本日は「大間温泉海峡保養センター」に泊まる。夕食は本マグロの大トロ、中トロ、赤身をメインに、陸マグロ（大間牛）のすき焼きと食べ比べという贅沢極まりないメニューになっている。

その本マグロの大トロはもちろんのこと、中トロも口の中でとろけるという表現が合っている。もはや究極と言っていいかもしれない。大間牛も同様で信じられないほどに柔らかく、美味しい。料理のプロのキキちゃんをもうならせるもので、この食べ比べに納得している。

まだ 3 日目だというのに「今回の旅で最高だね」と全員が言っている。



【夕食の大間マグロ陸マグロ（大間牛）食べ比べ 中央の皿が本マグロの大トロ、中トロ、赤身】

## ■ 仏ヶ浦

下北半島はその形から“まさかり”に例えられる。まさかりの刃の部分、つまり下北半島の西端に「仏ヶ浦」という景勝地がある。

車を駐車場に停め、遊歩道を 20 分くらい下っていくと海岸に出る。その名前が示すようにいかにも仏の慈悲に包まれるような奇岩が私たちを迎えてくれる。

海岸沿いに約 2km にわたって連なる白緑色の奇岩があり、冬の荒波が削り上げた大自然のアートといったものだ。透明度の高い深いエメラルドグリーンの海とのコントラストが美しく、まるで極楽の入り口のように思える。

観光情報では、死者があゝの世に旅立つ時あるいはこの世に戻ってくる時に立ち寄る場所がこの仏ヶ浦だと書かれている。あゝの世に旅立つ時は分かるが、この世に戻ってくる時とは、よく考えると凄いのことを言っている。



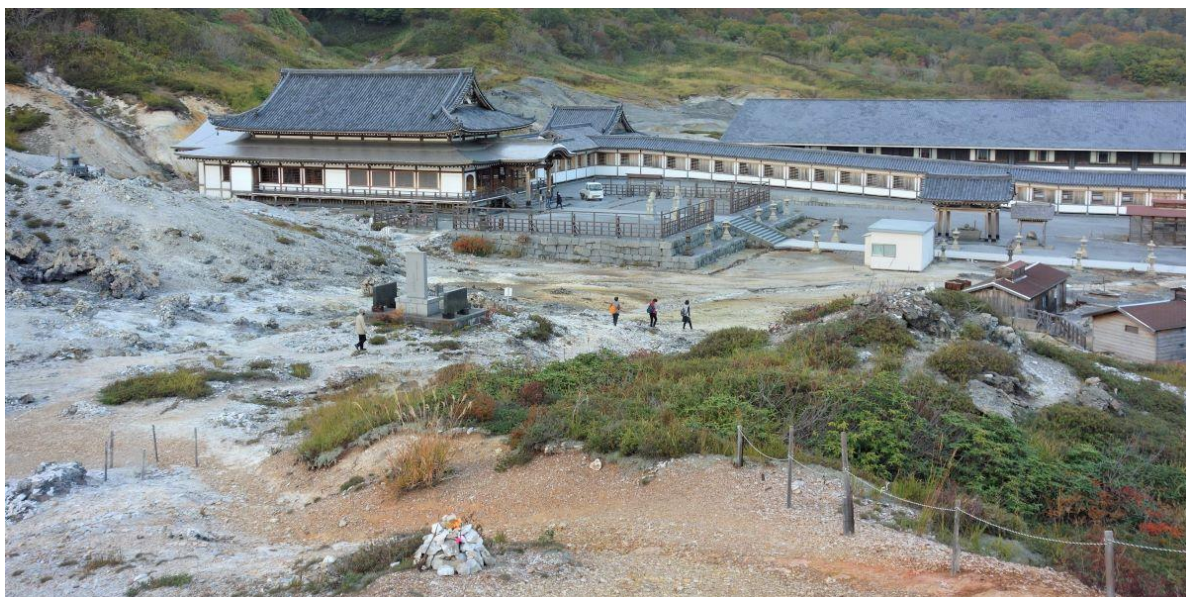
【仏ヶ浦の奇岩 その写真を撮る人】

絶景を楽しんだ後、駐車場までの帰り道は急な上り坂や階段が続き、登るのが結構大変だ。まだまだ若いと思っている男女 7 人秋物語のメンバーたちだが、なかなか辛いようだ。それでも励ましながら手を取りあって登る姿は、仏の慈悲に支えられているかのようだ。

## ■ 恐山

下北半島のほぼ中央に「恐山」がある。実は恐山という山はない。カルデラ湖の宇曽利山湖（通称ウズリ湖）を中心とした一帯を恐山と称しているだけで、死者の霊を呼びだす“イタコ”がいる霊場として有名だ。それゆえ仏ヶ浦では死者がこの世に戻って来るといった表現が使われていたのだろう。イタコは恐山大祭と恐山秋詣の時しかいないので、今回は会うことができない。

恐山の霊場に入場する。山門から真っ直ぐ延びる参道の向こうには風格ある恐山菩提寺があり、まずは参拝する。境内には風情ある温泉小屋がいくつかあって、宿泊客以外に日帰り参拝者も入浴できる。その温泉小屋の男湯を NHK「ブラタモリ」でタモリが覗いていたという説明書きがある。恐るべきテレビの力、霊場にも影響力がある。



【恐山菩提寺の地藏殿 右奥が宿坊 手前に修羅王地獄 右の小屋が温泉小屋】



【ウズリ湖の極楽浜（ヨコさん撮影）】

恐山菩提寺の境内からウズリ湖の極楽浜に出られる。途中に修羅王地獄などのこの世のものには思えない異様な光景が続く。石が積み上げられて無数の風車が回っており、所どころから熱い温泉や蒸気が噴出している。

男女7人秋物語のメンバーたちは手を合わせて拝む者、湖を眺める者、大地を踏みしめて歩く者、写真を撮る者など7者7様で実に面白い。ここは独特の世界感が創られる場所だからだろう。

ウズリ湖は直径 2km 弱のほぼ丸い湖で、湖底から硫化水素が噴出して湖水に溶解しており、そのため湖水は青白い独特の色をして、pH3.5の強い酸性になっている。

湖水が流れ出る川は湖近くでは「三途の川」と呼ばれ、下流では「正津川（しょうづがわ）」になる。発音が何となく似ているのは偶然ではないだろう。

## ■宿坊に泊まる

今夜は恐山の宿坊に泊まる。施設は新しく立派で昔ながらの宿坊を想像していたが、想像と全く違う。ロビーは明るくちょっとしたホテルのロビーと遜色ない。部屋は15畳+6畳で、4人で泊まるにはもったいない程だ。女性部屋も同じ大きさなので3人利用はさらに快適だろう。エアコンはあるがテレビ、冷蔵庫がない。よく考えれば宿坊なので当たり前のことだろう。

夕食時にアルコールを飲むことはできないが、部屋に入れば飲んでも構わない旨を電話で確認をしていた。しかし冷蔵庫の有無まで確認していなかった。

通りかかった女性スタッフに聞いてみると、やはり冷やす手段は無いという。それでもいい年をしたおっさんたちが困り果てている様子を見かねて、「私たちが使っている冷蔵庫の一角を 사용합니다か?」と言ってくれる。おっさんたちは「お願いしまーす」と大きな声で返事をする。

さらにヨコさんが、「氷もありますか?」と聞くと、「厨房でもらってきましょう」とまさしく神対応だ。神ではなく寺なので仏か、地獄に仏とはよく言ったものだ。おっと、この宿坊が地獄とは言い過ぎか。綺麗で整然としているので地獄と言うよりも無味乾燥の都会のように感じられる。おじさんたちはそこに咲く一輪の花を見つけたと言ったところだ。

その一輪の花の彼女は修行僧ではないが、従業員という感じもしない。ちょうどその中間的なポジションのようで、20代、少し細身の美人タイプだ。

宿坊の中に男女別の立派な内湯があって、もちろん温泉で大きな湯船なので30人くらいは同時に湯に浸かることができる。宿坊の隣に混浴の温泉小屋がある。先ほどの一輪の花の彼女はその混浴の湯が一番まるやかだと言っていた。

早速行って温泉小屋の引き戸を開けると女性客が1人出てきた。今まで湯に浸かっていたらしい。年の頃ならアラフォー、ポッチャリ系の温泉マニアという感じがする。

湯船には男性客数人が入っており、そこに我々男性陣4人も加わる。お湯の温度はちょうど良く、酸性の硫黄泉で白濁している。私の好みの湯で、辺境の恐山でこんなに良い湯に浸かれるとは思ってもしなかった。願わくは若い女の子と混浴出来たら最高だが、そこまで贅沢は言わないでおこう。



【混浴の風呂】

精進料理といえば食後の後片付けが付きものだが、それはない。箸は明日の朝食でも使うから部屋に持ち帰ってくれと言われる。



### ■ヨコハマの味と香り

下北半島の陸奥湾に面した西側は穏やか砂浜の海岸線が続く。そんな場所なのでここは横浜という町名になっている。もちろん神奈川県横浜市とは関係ない。

その横浜町の「道の駅よこはま」に午前中の早い時間に立ち寄り、美味そうなおにぎりを見つける。それは「ホタテおこわにぎり」で、ホタテ貝が1個丸ごと入っていて、山菜入りの炊き込みご飯でにぎられている。1個140円と書かれているのも魅力的で、お金と時間の節約にもなる。何よりも見たことも食べたこともないものとの遭遇はグルメ心をくすぐる。

私たちはこれを買って昼食にしたが、期待どおりの味で“ヨコハマの味と香り”を堪能した。



【ホタテのおこわにぎり】

## 第三章 十和田・八甲田

### ■奥入瀬溪流を歩く

野辺地駅でチーちゃんとお別れになる。「もっと一緒に旅行したかったよー」と半ベソをかいているから、余程今回の旅そしてメンバーが気に入ったようだ。

彼女と別れて、車は一路「奥入瀬溪流」を目指す。

奥入瀬溪流は十和田湖の水が唯一流れ出る川で、溪流沿いに10km近く遊歩道が続いている。

私たちは車に乗って下流から上流まで奥入瀬溪流を車窓からひととおり眺め、十和田湖畔に出る。再び十和田湖畔から奥入瀬溪流の約半分の地点まで車で行き、私以外の5人はそこから奥入瀬溪流を上流に向けて遊歩道を歩く。私は何回も奥入瀬溪流を歩いているので今回は運転手に徹して、1人で十和田湖畔に車を停めて下流に向けて歩き、途中で合流するという作戦を取った。

十和田湖の湖面の標高は約400mで、そこから流れ出る奥入瀬溪流はもう少し低いので紅葉はまだ少し早い。それでもいい具合に色づいている木々もあって、溪流の清々しさと相まってメンバーたちは満足の表情をしている。何よりも足取りが軽いのがその証拠かもしれない。

そんなメンバーたちの横をオープントップバスが走り去っていく。星野リゾート奥入瀬溪流ホテルのバスだ。そのホテルは奥入瀬溪流の下流にあり、この季節だけ2連泊を条件にしている。連泊して奥入瀬溪流を歩くことを推奨しているからだ。さすが体験型の旅を目指している星野リゾートはやるのが違う。それほど約10kmの紅葉の奥入瀬溪流は魅力的ということなのだろう。



【奥入瀬溪流（ヨコさん撮影）】

#### ■十和田湖を眺める

十和田湖を望む展望台がある。それは十和田湖南部の標高 583m「瞰湖台（かんこだい）」で、瞰湖台までの高低差約 180m をトレッキングではなく車で登る。そしてそこからは実に見事な光景が広がっている。

十和田湖はほぼ円形をしており、湖の南に突き出た半島が 2 つある。東側の半島が御倉半島、西側が中山半島という。

瞰湖台は御倉半島の付け根付近にあり、そこから中山半島を望むことになる。湖とは思えない絶景に一同は興奮醒めあらしめ様子だ。私もこんなシュチュエーションは経験したことがない。中山半島の上空からは天使のハシゴと呼ばれる薄明光線がうつすらと見えているので、より幻想的に感じる。



【瞰湖台から十和田湖の中山半島を見る】

## ■十和田湖の漁師宿

今回は後から女性陣の宿を取ることにになり、どうしても酸ヶ湯温泉に泊まることができなかった。そのため女性陣は別の宿に泊まることにして十和田湖湖畔の民宿「春山荘」を予約した。

この宿は十和田湖のヒメマスを出してくれる漁師宿で、常連客が多くネットでの評判はかなり良い。私たち男性陣は宿に女性陣を送り届けただけで泊まっただけではないが、女性陣からその評価を聞くと、実に素晴らしいと言っている。

女将さんが気配り抜群で、それもさりげない気配りなので嫌味もなく、とても安らいだという。食事はヒメマスの刺身と塩焼き、牛の陶板焼きなどで、非常に美味かったとご機嫌だ。小さな家庭的な宿なので出来たての料理が温かいまま出てきたと言っている。料理屋をやっているキキちゃんが太鼓判を押すのだから間違いない。彼女たちはまたあの宿に泊まりたいと言っているから、その感激の程が理解できる。



【春山荘の夕食】

## ■青荷温泉 ランプの宿

青森県の南部、弘前と十和田湖の中間あたりに青荷温泉という一軒宿がある。昔からそして今でも宿には電気が来ておらず、ランプの宿として有名だ。

今夜は女性陣が十和田湖の民宿に泊まっているので男性陣だけの宿泊になる。

私はこの宿には 20 年以上前に 2 回程泊りに来ている。ランプの生活を楽しみ、青森ヒバで造られている湯殿と湯船で温泉に浸かってその独特の香りが思い出に残っている。



【部屋の石油ランプ】

しかし宿に入ると青森ヒバではなく石油の臭いが鼻につく。既に暗くなっているので宿の至る所に石油ランプが点いているからだ。臭いはさておき、暗いほのかな明かりは何か暖かさを感じる。

以前、私が来た時はまだ 40 代だったのでランプの明かりの下で地図を見た思い出がある。しかし今の私はこの明るさでは細かな地図を見ようと思わない。部屋には電灯はもちろん、コンセントもないからテレビもなく、携帯電話も圏外なので電波も入らない。

従ってスマホのチェックも本も読めない。結局この宿では、温泉に入るか、同行者や他のお客と話をするか、寝るかという選択肢しかない。しかしそれがこの宿の魅力なのだろう。

私は「旅とは、非日常への移動」と考えている。現代において電気や電波（情報）は日常生活そのもので、それが無い世界はまさしく非日常だ。つまりランプ生活そのものが旅の醍醐味になる。しかし電気のない昔はランプの生活が日常になり、非日常とは時代と共に変化する。

そう考えるといっそ“ランプもない宿”というのも面白いかもしれない。一体どんな宿になるのか想像するだけでワクワクするが、お客が来るか来ないかはやってみないと分からない。

そんなこと思いながら温泉に浸かる。



【青森ヒバ造りの湯殿と湯船、ランプの照明】

夕食会場に足を運ぶと、「テレビの取材でお邪魔しています」とカメラマンが声を掛けてきた。取材クルーはたった1名で、3日間かけてこのランプの宿を取材すると言っている。

その彼から質問攻めを受け、「どこから来たのですか？」に始まって、この宿を選んだ理由、どこが気に入ったかなどをかなり細かく聞かれる。同様の質問をほとんどの宿泊客にしているから、最終的にテレビ放映で使われないかもしれないが、それでも皆が緊張気味に丁寧に応えるのはテレビの威力だろう。

夕食もランプの下では、料理はあまり良く見えない。それでも山の幸を上手く使った手の込んだ郷土料理の「けの汁」、「イガミンチ」もあって、なかなかいける。岩魚の塩焼きはまだ温かいから、頭からかぶりつく。隣に座ったヒデさんは尻尾まで食べている。

食事の途中で館主の挨拶が入る。と言っても本日の料理の説明で、津軽弁なのでよく分からない部分の方が多い。それでもところどころで笑いを取る部分だけは標準語になるのが面白い。おそらく毎日同じことを言っており、その言葉も内容も良く考えられている。

岩魚の骨酒というメニューを日本酒好きのヨシさんが発見する。早速注文すると大きな洗面器のような器に熱燗の日本酒が入っており、その中に焼いた岩魚が1尾入っている。インスタ映えしそうな画（え）が取れそうなので、例のカメラマンもやって来て一同撮影タイムになる。

日本酒の中の岩魚の身をほぐすのはヨコさんだ。手慣れたもので、結果美味しい骨酒をいただく。カメラマンにも勧めたが、仕事中とのことで辞退した。いやそれだけではなくこの宿が満室なのでこれから車を運転して麓の街に戻ると言う。それほど人気の宿ということなのだろう。

旅行後に放送されたテレビ朝日のニュース番組を見た。関西での放送はないと聞いていたので私が録画して皆に送った。

夕食のシーンで4人とも映っており、「おいしいですよ」というヨコさんの言葉、暗くてよく見えないので「何が何やらわからんな」というヒデさんの言葉も入っている。ちょっとした有名人になった気持ちだ。



【青荷温泉ランプの宿のテレビ朝日ニュース番組の放映シーン】

放送の内容はランプだけで電気も電波もない温泉を目指して日本各地、いや世界各地から来た旅行者たちが「不便だけど、これがたまらなく良い」という声を紹介するのが番組の大きな流れだが、その中でランプの宿と知らずに出張で泊まってしまい、携帯電話が繋がらないので電波を求めて山中をさまようというビジネスマンが紹介されていた。いかにもありそうだが、あまりに滑稽な話でにわかに信じられない。何となくテレビ局の意図的なものが感じられる。

## ■八甲田山

八甲田山に登るために八甲田山ロープウェイの山麓駅に着く。しかしロープウェイは2時間待ちと聞かされる。本日は日曜日、そして紅葉シーズン真っ盛りなのでそういうこともあるのだと自分たちに言い聞かせて待つことにした。

2時間待ちの間に近くの広場で昼食を食べる。昼食といっても十和田湖畔の小さな店で買った白米の塩のおにぎりが2個、中には梅干しが入っていて、これが結構いける。今回の旅はこのような昼食が多いが、意外に受けている。改めて旅先での昼食に何を求めるかを考えてしまう。朝夕の食事は比較的豪華なので、昼は簡単で良い。地元も名物なら最高だろう。

八甲田山のロープウェイの山麓駅は標高660m、そこからロープウェイに乗って標高1310mの山頂公園駅まで一気に登る。紅葉は山麓駅から中間地点付近までは絶好調だ。テレビのニュースなどでこのロープウェイからの紅葉シーンが放送されるが、まさしくその場所、その時期になっている。中間地点付近から上は紅葉をしない木々になり、頂上ではほとんど紅葉をしていない。そもそも紅葉するのは落葉広葉樹で、常緑広葉樹や針葉樹はあまり色が変わらない。

そう考えると紅葉した木々の中に紅葉しない木が点在している景色がベストショットだろう。



【八甲田ロープウェイから見た紅葉 紅葉しない木が点在】

#### ■昔ながらの湯治場、酸ヶ湯温泉

八甲田山の中腹にある「酸ヶ湯温泉」は毎年積雪が 10m 超という宿で、標高は 900m、八甲田山ロープウェイの中間付近に相当し、宿の周りは紅葉真っ盛りになっている。

女性陣は予約が取れなかったもので、今宵は昨夜男性陣が泊まった青荷温泉ランプの宿に泊まる。本日もテレビ取材があることも知らせてあり、化粧の乗りを気にしていた。



【酸ヶ湯温泉の駐車場から見た宿と裏山】

この宿は千人風呂という混浴の大きな内湯が有名だ。混浴といっても脱衣場は男女別で湯殿に入るところで一緒になるのだが、大きな衝立が張り出しておりあまり気にはならないだろう。

昔はその衝立がなかったもので、入浴中の男性客は女性脱衣場の入口の一点を凝視して湯に浸かっていた。いや浸かりっぱなしではのぼせてしまうので、湯船から出て凝視するという状態だった。あれでは女性客はかなりの勇気が必要だっただろう。

泉質は pH1.5 という強酸性の硫黄泉で、私好みの湯になっている。



【千人風呂 右が衝立 観光協会の HP より】

今回のように 10 日間以上の長旅をすると途中で洗濯をする必要がある。酸ヶ湯温泉は湯治場なので長期生活もできるような設備もあり、当然洗濯機もそろっている。

洗濯は 1 人当りでは少量なので洗濯機に男性陣 4 人分の洗濯物を入れて洗うのだが、今回ヨコさんはその時に使うネット（網）を持参した。実に便利で、個人の洗濯物を仕分ける必要がない。ちょっとしたアイデアだが、これはいただきだ。

洗濯機もしかり、湯治場なので比較的広い自炊場もある。テレビはあるが部屋は簡素だ。夕食は豪華とは言い難いが湯治場の温泉宿らしい地元でとれた山の幸が並ぶ。この宿の人気の秘密は“湯治体験”といったところかもしれない。湯治は現代人にとってはまさしく非日常になる。

## 第四章 八幡平・田沢湖

### ■大湯環状列石

三内丸山遺跡と同じ世界遺産の構成資産の「大湯環状列石」に立ち寄る。初めて訪れる私は英国のストーンヘンジのようなものを想像していたが、想像よりもかなり小規模で落胆は否めない。

説明看板には、この遺跡は鮭が遡上する河川の近くであり直径約 52m の万座環状列石と約 44m の野中堂環状列石があって、それ取り囲むように建物などが同心円状にあり、周辺からは土偶や動物の形の土製品など多く出土しており、定住が成熟する頃の祭祀遺跡だと書かれている。



【大湯環状列石】

メンバーから「これが世界遺産？」という声も聞こえてくる。私も正直がっかりしたので、その理由を彼らに説明した。

世界遺産は単独で顕著な普遍的価値があるものが一般的だが、シリアル・ノミネーション・サイト（連続性のある遺産）と呼ばれるものは必ずしも個々の遺産が顕著な普遍的価値を持っている必要はなく全体として持っていれば良いと定義されている。その場合は各遺産を繋ぐストーリーが重視される。言い方は悪いが“一山いくらの”なものになっている。

「北海道・北東北の縄文遺跡群」も 17 の構成資産で出来ていて、縄文時代の定住から成熟までを 6 つに区分している。この環状列石は共同の祭祀場と墓地の進出、三内丸山遺跡は拠点集落の出現という区分に類している。

ついでに「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」は 24 もの構成資産があり、長崎の軍艦島や伊豆韮山の反射炉など全国 8 つの県にまたがっている。そのひとつが岩手県釜石市の橋野鉄鉱山で、今回の旅では時間があれば行きたい場所だが、いっきにトーンダウンする。

#### ■八幡平（はちまんたい）

八幡平は秋田県と岩手県の県境にあり、私たちは秋田県側から八幡平に入る。山は既に紅葉が見頃になっている。

八幡平大沼のビジターセンターに車を停めて、大沼一周の散策コースを歩く。この付近の標高は約 950m で紅葉真っ盛りだ。大沼の畔の木道や小高い山道を一周して約 30 分、ちょうどいい運動になる。見事な紅葉を見ながらの散策は実に気持ち良い。

もしも男女 7 人秋物語という映画を撮るならば、私は是非このシーンを使いたい。



【大沼一周コースを歩く】



【大沼一周コースから見た大沼】

そして八幡平アスピーテラインを車で登って標高 1540m 八幡平山頂付近に行くが紅葉どころか、強い風が吹いており雲の中なので何も見えない。レストハウスに入り、道の駅で買ったおにぎりを食べて早々に下山する。ここでも地元で買ったおにぎりが活躍する。

#### ■強酸性の玉川温泉

ここ 2 日間は男女別々に宿をとっていたが、今宵は玉川温泉と一緒に泊まる。不思議なものでずっと一緒にいるよりもある意味新鮮な感じがする。女性陣に聞いてもこの分泊のアイデアは結果的には大正解だと言っているから、瓢箪から独楽というものだ。

玉川温泉は強酸性の温泉として有名で、強酸性と言えば草津温泉も有名だが、玉川温泉はそれよりも酸性度が高い日本一の強酸性を誇っている。それゆえ玉川温泉は現代医療に見放された患者が最後の望みを賭けて温泉療養に訪れるという温泉で、強酸性だけでなくラジウム泉もあり放射線療養も期待できる。岩盤浴では寝て蒸気を吸い込むので吸引泉効果もある。



【玉川温泉】

酸性の度合いを示す水素イオン濃度 pH（ペーハー、またはピーエイチ）は理科の授業で教わったが、7 が中性で数字が小さくなるほど酸性になり、数字が大きくなるとアルカリ性になる。

草津温泉の pH は 2.0 前後、世間一般ではかなり強酸性だが、対して玉川温泉は 1.13 と一桁違う。一桁という意味は、pH は対数なので濃度が 10 倍変化して数字が 1 つ変わる。つまり pH1.13 を 10 倍に薄めると pH2.13 になる。いかに玉川温泉の酸性度が高いかが分かる。ちなみに胃液の pH は満腹時で 4、空腹時で 2 程度なので、玉川温泉は胃液よりも酸性が強い。

大浴場に行くと、源泉 100%と書かれた大きな浴槽がある。しかしいきなり 100%に浸かるのは危険なので弱酸性の湯や 50%に希釈した湯、その他に蒸し風呂、箱の中に入る一人蒸し風呂、打たせ湯、立湯といったバラエティに富んだ浴槽もある。

メンバーたちはもちろんこの日本一の強酸性温泉は初体験で、その刺激に男性陣は「あそのの先っぽがヒリヒリする」と言っている。私も半年前にこの玉川温泉の源泉を引く新玉川温泉に泊まってその凄さを体験した。（詳しくは旅行記「東北秘湯の旅 2022」参照）

#### ■鍵紛失事件勃発

玉川温泉の玄関には鍵付きの靴箱があって、鍵はお客が各自管理するようになっている。ところが翌日の出発時に鍵がないと騒いでいるメンバーがいる。誰とは言わないが女性陣の約 1 名だ。

最初は簡単に見つかると思っていたが、これが意外に難航し、全員が鍵探しに奔走することになる。男性陣は女性部屋に戻って家探し、女性陣は荷物をロビーの片隅で開けて探し始める。

すると別の鍵が出てきた。聞くと大間温泉海峡保養センターでも貴重品金庫の鍵を無くして、千円を払って開けてもらったと言っている。その金庫の鍵が荷物の中から出てきた。そんなことがあったのかと男性陣は開いた口が塞がらない。

全員で奮闘したが、結局のところ下駄箱の鍵は見つからないので宿のスタッフにお願いして靴箱を開けてもらうことになる。しかしどの靴箱に入れたのさえも本人はよく覚えておらず、宿のスタッフも半分呆れた顔をしている。それでも何とか靴との再会を果たす。

合鍵の製作費用として 3 千円を請求され、支払った後に 30 分遅れの出発になる。

本件には後日談がある。鍵を無くした彼女が旅行を終えて家に帰って荷物を整理していたら、その鍵が出てきたとグループ LINE で連絡が入る。すると別メンバーが「宿に連絡してみて、どんな対応をするのか興味深いね」と返した。彼女は宿に連絡をして鍵を送り返す旨を伝えると返金すると言っているという。一週間以上も前のことなのに、宿の対応もなかなか見事だ。

#### ■田沢湖の「たつこ像」

秋田県仙北市にある田沢湖にやって来る。水深約 423m は日本で一番深いから真冬でも湖面は凍らない。湖面の標高は 249m なので、湖底は海面下 174m という珍しい湖だ。

その田沢湖の湖畔に立つ「たつこ像」を訪れる。この像は「辰子姫伝説」からできた像で、その伝説をキキちゃんがスマホで調べて説明を始める。

昔、田沢村に辰子という娘が母と暮らしていた。辰子は近隣でも評判の美人であったが、いつしかその美しさを永遠にとどめたいと願い、100 日観音堂に通いついに霊泉のお告げを得た。

辰子は霊泉を探しに 3 人の娘と共に山に入ったが、川で獲った魚を焼いているうちに我慢できず、ほかの娘たちの分まで食べてしまった。すると激しい渇きに襲われ、水を求めるうちに泉を見つけていつまでも飲み続け、気がついた時には竜に化身していた。辰子は激しい豪雨と山崩れで現れた湖に入り主となった。

竜になった辰子を見て逃げ帰った娘たちの話を聞き、辰子の母は松明（たいまつ）を手に出しに行った。湖のほとりで母が泣き叫ぶと辰子が現れ、母に好物の国鱒（クニマス）をおくことを約束して別れを告げ、湖の底に再び戻っていった。

母は嘆き悲しみ、手にしていた松明の燃え残りを湖に投げ捨てた。すると燃え残りの木の尻は魚に変わった。これが国鱒の別名を「木の尻鱒」というようになり、母の家では湖からきた国鱒が絶えることがなかったという。

たつこ像は金色に輝いており、さすが評判の美人だ。男性陣はたつこ像に手を合わせて立ち去ったが、女性陣は「美貌を欲張ったらいかんよ、この世に永遠はないのよ」と言っていたから、なかなか手厳しい。



【田沢湖のたつこ像】

## ■日本三大うどん

日本三大うどんは、と問われ讃岐うどん、稲庭うどんは直ぐに出てくる。3 つ目は諸説あって五島うどん、氷見うどん、水沢うどんなどが挙げられる。おっと、3 つ目の話はどうでもよく、今回はせっかくの秋田県訪問なので稲庭うどんを食べることを旅の目的のひとつにしている。

稲庭うどんは独特の手延べ製法で作られる。江戸時代は殿様に献上された名品で製法は門外不出の秘伝とされ、一子相伝で味も秘密も守られ続けた。しかし 1972 年それを佐藤養助が公開して、手延べ製法が広く伝わり一般人にも食されるようになり知名度が一気に向上した。

公開しなければ商売を独占できたが、日本三大うどんにはならなかっただろう。何が正解だったかは後世が評価するものだが、商売とは実に難しいものだと感じる。

ちなみに佐藤養助とは歴代の当主が同じ名前を継ぐので、名前は何代も受け継がれている。

私たちは田沢湖畔にある食堂「共栄パレス」に立ち寄る。この店では稲庭うどんの製造・実演も行っており、麺を手で延ばす作業を実際に見ることができる。従って打ちたての稲庭うどんを食べることができる。

稲庭うどんとビールを注文する。次の運転手は決まっており、酒の神様には既に生贄を差し出している。

出てきたうどんは濃い出し汁に山菜と蒲鉾が乗ったシンプルなものの、手延べ製法の麺なので食感に特徴があってすると食べやすい。さすが日本三大うどんだ。



【稲庭うどん】

## ■乳頭温泉郷「蟹場（がにば）温泉」に泊まる

「乳頭温泉郷」にやって来るとブナ林の見事な紅葉に遭遇する。キラキラ輝いており、その輝きが独特の臨場感をもたらしている。ブナと言えば秋田県と青森県にまたがる世界遺産の白神山地だが、そこから離れた乳頭温泉郷もブナの木が多い。



【乳頭温泉郷に行く途中のブナ林の紅葉】

乳頭温泉郷には「鶴の湯」、「妙の湯」、「大釜温泉」、「蟹場温泉」、「孫六温泉」、「黒湯温泉」、「休暇村乳頭温泉郷」の7つの宿が点在しており、温泉の泉質も微妙に異なっている。

今宵私たちは「蟹場温泉」に宿をとっている。

この宿には混浴露天風呂があり、宿の廊下にはこの露天風呂の雪景色の写真が飾ってある。写真を見るかぎり実にいい感じの露天風呂になっている。

この露天風呂は宿の母屋から少し離れた場所にあって、風情ある男女別の脱衣場の建物がポツンと建っている。無理すれば30人くらいは入れそうな露天風呂で、湯は乳頭温泉郷では珍しい無色透明、重曹炭酸水素泉で、湧出温度は55℃という。湧き出た熱い源泉が大きな湯船で外気に触れると適温の42℃くらいになる。従ってやや熱い場所とやや温い場所が適度に存在する湯船になっており比較的入り易い。

混浴といってもいつものように男性ばかりで、私たち男性陣以外に男性客2人が入っている。どこから来たとか、紅葉が綺麗だとか世間話に花が咲いている。

その2人が湯から上がって着替えて出て行った。そこに女性陣が様子見にやって来た。ヨシさんは「他のお客がいらないから混浴できるよ」と誘い、彼女たちも「それでは・・・」と言いながらタオルで隠しながら入ってきた。もちろん湯船にタオルを入れないマナーは分かっているので、お湯に浸かるのはスッポンポンだ。辺りは既に暗くなっており、夕暮れの露天風呂でかすかな明かりが灯っている。

紅葉はライトアップされているが、湯けむりにかすんでいる。女性陣もまた湯けむりにかすんでいる。外気温もお湯の温度もちょうど良い。



【混浴露天風呂】

夕食は秋田名物の「きりたんぼ鍋」と「いぶりがっこ」、他には岩魚の塩焼き、山菜、きのこなどの小鉢がテーブルに並んでいる。いかにも秋田の山奥の宿を感じさせてくれる。

夕食の後、体が冷えており再び温泉に行く。

この宿には混浴露天風呂以外に男女別の内湯、そして女性専用露天風呂がある。混浴露天風呂は女性専用時間が設定されており、その間は女性専用露天風呂が男性専用になる。

男性陣はその切り替わりの時間に男性専用露天風呂に行く。すると数人の男性客が入口で待っている。理由を聞くと時間を過ぎたのに女性客が出てこないから入れないという。「とんでもないお客がいますね」と言いながら、私たちも待つこと 10 分。そして「すみません、遅くなりました」と出てきたのは私たちの女性陣だ。男性陣は仲間でないような顔をして、何気なく露天風呂に入り、無言で入浴を果たすことになった。

### ■人気の乳頭温泉郷

乳頭温泉郷で有名な「鶴の湯」、そして「黒湯温泉」に立ち寄り湯で訪れる。どちらも人気の宿で、立ち寄り客も多い。

鶴の湯はかつて秋田藩主が湯に入りに来たので“本陣”と呼ばれている建物があって、入口の構えがなかなか立派なものになっている。

白濁の混浴露天風呂が雑誌やテレビで紹介される。脱衣場は男女別々で女性脱衣場を出たところから深い白濁の湯になっており、湯の中を歩いて来られるので入り易い。

そしてまたしても女性陣との混浴になるが、今度は我が女性陣を筆頭に別の女性客たちが付いてきている。それはまるで春日局を筆頭に奥女中たちが続いて参上するかの如くで、キキちゃんもミッチちゃんも風格さえも感じられる。

黒湯温泉にも混浴露天風呂があるが、こちらはフルオープンでさすがに混浴する女性はいない。

1994 年、私はこの混浴の湯船で当時 6 才の息子と一緒に入った写真が残っている。あれから 30 年近く経っても黒湯温泉の湯はコンコンと湧き出ており、風呂も景色も変わっていない。変わったのは年を重ねた自分だけで、温泉に浸かりながら人間とは何と小さなもので一瞬のものなのかと感じ入ってしまう。



【鶴の湯の入口】



【黒湯温泉の混浴露天風呂】

## 第五章 岩手県内陸部

### ■わんこそば

そば粉を作る時は殻をむいたそばの実を一番粉から四番粉に分類する。そばは白いものから黒っぽいものなどあるが、そばの実の中心に近いほど白くなり、どの部分を使うかによってそばの種類が変わる。黒っぽいほど栄養価と香りが高く、よく耳にする「更科そば」は白い部分の一番粉だけで打ったそばで、白いそばの総称になっている。

さて、日本三大そばというのがある。「戸隠そば」、「出雲そば」、そして岩手の「わんこそば」だ。戸隠そばと出雲そばは粉の選別をせずに殻の付いたそばの実をそのまま挽くので黒っぽい。それに対してわんこそばは、どちらかと言えば白っぽい。しかしわんこそばは“味や香り”よりも“食べ方と量”にこだわりがあり、そば通からすれば邪道かもしれない。

今回私たちは、そのわんこそばを本場の盛岡市内「東家」で食べる。店に入り給仕の女性から食べ方などを聞くと、わんこそば 15 杯で普通の盛りそば 1 杯に相当するというから、最低でも 20～30 杯くらいはいけるとメンバーたちは意気込んで挑戦する。

「はい、どっこい」、「じゃん、じゃん」という掛け声と共にみんな必死な形相で食べ始める。

私は 45 年前の大学生の時以来のわんこそばで、当時は 68 杯だったのでその記録を目指して食べるが残念ながら 64 杯で終わる。

初挑戦のミッチちゃんが 85 杯でメンバー最高記録を達成した。彼女は最後まで食べていたので、給仕の女性から“わんこそばの集中砲火”を浴びて最後の 5 杯くらいは一瞬の隙をつかれてそばを入れられていた。

この店では食べ終わったわんこそばの数の証明書を発行してくれる。

ちなみにこの店の記録は男性 500 杯、女性 570 杯で、やはり女性の方が多い



【私が食べたわんこそばと証明書】

### ■夏油（げとう）温泉

岩手県西部の山の中、標高約 570m の場所に夏油温泉「元湯夏油」という宿がある。昔ながらの湯治宿で、混浴露天風呂が 4 つ、女性専用露天風呂が 1 つ、男女別の内湯が各 2 つずつある。旅館部には本館・別館・嶽館・駒形館、自炊部には紅葉館・薬師館・夏油館・経塚館とあって、それなりに部屋数があるので、本日は 3 つの大手旅行会社から団体客が訪れており結構な賑わいになっている。昨今の秘湯ブームと今が紅葉の見頃だからだろう。

実は私も半年前に、その大手旅行会社のツアーでこの宿に泊まった。(詳しくは旅行記「東北秘湯の旅 2022」参照) その時はこの宿で一番人気の露天風呂「大湯」は熱くて 30 秒しか浸かることができなかった。しかし今回はやや熱い程度で比較的快適に入浴できた。季節や諸条件によって泉温はかなり変化する。

大湯以外の露天風呂も、川の直ぐ隣にあるのでせせらぎを聞きながら、紅葉を楽しむことができる。



【露天風呂の大湯】

ここ数日は立ち寄り湯も含めて毎日のように秘湯の温泉を堪能している。それも強烈な個性ある温泉ばかりでメンバーたちも慣れてきている。秘湯が日常化しており、非日常ではなくなっている。そのためあまり感激もしていない様子だ。

これは明らかに旅行計画、それも行程の組み方に問題がある。「一体誰が考えたのだ」と言いたくなる。私は考えた人に「旅の本質は非日常だよ、まだまだ甘いね」と伝えたい。

#### ■極楽浄土を再現した平泉

岩手県の平泉にやって来る。ヨコさんのリクエストの地で、彼がカメラのシャッターを押す手もいつもよりも慎重に見えて、そして回数も多い。

平泉は世界遺産に登録されており、正式な登録名称は「平泉 仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」という。

浄土とは死後の世界のことで、大陸から伝わった仏教は日本古来の自然崇拜と融合しながら進化して、この東北の地では独自の発展をした。平泉は 12 世紀の末法思想（釈迦の教えが時代とともに正しく伝えられなくなり、最後は教えが全く守られない時代が来るという仏教的考え方）の広がりとともに興隆した浄土思想における仏国土（浄土）を再現したということが、世界遺産検定のテキストに載っている。

その仏国土は奥州藤原家が 3 代をかけて都（京都）から遠く離れた地に造ったもので、ある意味では当時の理想郷だったのだろう。その時期は 1087 年から源頼朝に滅ぼされる 1189 年までだから、今からおよそ 900 年前のことになる。

縄文遺跡群や下北半島の仏教信仰、そしてこの理想郷の中尊寺など、東北地方の北部は人知れず日本の精神文化の最先端だったのかもしれない。



【中尊寺本堂】



【金色堂が入っている覆堂】

金色堂は保護のために覆堂（おおいどう）と呼ばれる建物に覆われている。その中は写真撮影が禁止されているが、金色堂は必見の代物だ。単に金色に輝いているだけでなく、金色堂だけが中尊寺創建当初の姿を今に伝える唯一の建物で、当時の理想郷の想いが詰まっている。

#### ■須川高原温泉

岩手県と秋田県と宮城県の 3 県の県境付近に標高 1625m の栗駒山がある。その中腹辺りに今夜泊まる「須川高原温泉」がある。大きな無料駐車場があるから栗駒山登山のベース基地にもなっている。

天候や時間などの条件がそろえば宿から栗駒山の山頂を目指そうとしていたが、残念ながら登山道は閉鎖されており迂回ルートもあるが、6 時間以上かかるので今回は断念する。

標高 1110m の須川高原温泉から、源泉が湧き出ている裏山を通して標高 1160m の名残ヶ原まで行って戻って来るトレッキングコースを散策する。途中の荒涼とした場所の中でも風を遮る窪地があって、そこで昼食を食べ 1 時間 30 分の散策を終える。ここでも道の駅で買ったおにぎりが役に立つ。



【トレッキングコースの木道を歩く】



【荒涼とした窪地での昼食風景】

私たちの泊まる宿は岩手県にあるが、歩いてすぐに県境があつて秋田県側に「栗駒山荘」という宿がある。この宿に須川高原温泉が温泉を分けているということでその風呂にも無料で入ることができる。私たちはまずは栗駒山荘の湯に浸かる。強酸性 pH2.2 の白濁した硫黄泉だ。

露天風呂からは入浴しながら東北地方で2番目に高い標高2236mの鳥海山を望むことができる。鳥海山の山頂は冬の訪れを告げるように薄っすらと白くなっている。この絶景を見せるために造った宿と露天風呂なので抜群にいい眺めだ。



【雪化粧した鳥海山を臨む栗駒荘】

須川高原温泉の露天風呂は私たちの3階の角部屋から丸見えで、そのことは支配人から事前に聞いていたが、まさしくその通りだ。その時ヒデさんが「女湯は見えないのですか？」と聞いたら、支配人は「それが見えたら、大変なことになってしまいますよ」と答えた。確かに大変だ。

男性露天風呂は木材で囲っており、入浴している人たちは気が付いていないらしい。

私たちも入ったが、気にならなかった。むしろ湯の色が青白っぽいことの方が気になり、男性陣はブルーラグーンと呼んでいた。ブルーラグーンはアイランドにある露天風呂で、確かに同じように青白かった。

女性陣は「あれは浴槽の床を青く塗ってあるのよ」と言って、なるほどと男性陣がうなずく。



【部屋から見た男性露天風呂】

本日の夕食が男女 7 人秋物語の最後の晩餐になる。昨今は冷凍技術と流通によって山奥なのにマグロの刺身など出す宿もあるが、ここは地のモノで勝負している。固形燃料のコンロが 2 つあって、山菜中心の鍋物と豚肉の鉄板焼き、そして岩魚の塩焼きや煮物などの小鉢が並んでいる。

若い男性スタッフに聞くと豚肉は岩手県ブランドの白ゆりポークで、自然に恵まれた北上市郊外で独自の飼料で育てられているという。そのためにきめ細かく弾力のある肉質が特徴とのことで、確かに良い食感をしている。焼肉のタレは岩手県、秋田県、宮城県のもので用意されており、3 県のタレの味比べができるようになっている。素朴ながら考えられた料理に脱帽する。



【須川高原温泉の夕食】

話を聞いた男性スタッフはまだ若く、ちょっとシャイな好青年なので、女性陣が質問攻めをしている。彼は岩手県一関市の出身の 25 才、彼女はまだいないと言い、好きな女性のタイプを聞くと「お姉さま方のような人」と言うからキキちゃんもミッチちゃんもザワザワし始める。

水を差すように、私が「この宿は、今月 25 日で冬季休業になるよね、そうしたらどうするの？」と聞くと、「この直ぐ下のスキー場で働きます」と明るく答えてくれる。お姉さま方は口をそろえて「頑張ってね」と言って、最後の晩餐はお開きになる。

#### ■盛岡冷麺

最終日、一連の旅行日程が終了し青森空港そして新青森駅で男女 7 人秋物語の旅が終わり、私 1 人の旅になる。盛岡に立ち寄り、友人と会って久しぶりにグラスを傾ける。

私と友人は地元の有名店「盛楼閣」で焼肉を食べて冷麺を注文する。ここ盛岡では冷麺、じゃじゃ麺、わんこそばを「盛岡三大麺」と称している。今回の旅で 3 回目の“三大〇〇”になる。

さて冷麺の食べ方で、彼は辛味エキスと辛味ない冷麺を別々に注文してくれた。それが地元の冷麺ツウの食べ方だと言っている。

確かに辛味の全くない冷麺はこだわりの出汁の味を堪能でき、その後に辛味を足すとあの盛岡冷麺の味になる。そしてさすが本場の人気店なので美味しい。

話題は岩手県のことになる。東北の北3県を合わせると九州と同じ大きさだということは知っていたが、盛岡在住の彼は「岩手県は四国と同じ大きさだぞ」と言っている。岩手県は都道府県で北海道に次ぐ広さで、今回の旅では青森県はほぼ巡ったが、岩手県は残念ながら山間部だけしか行っていない。

私は「岩手は広いから、また来るよ」と言い別れた。



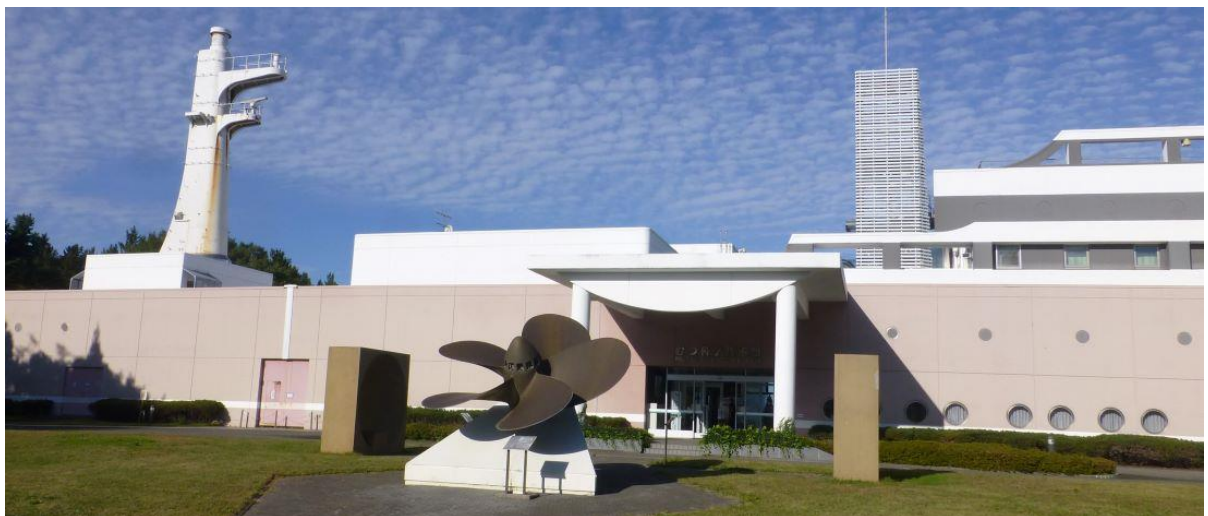
【冷麺 左が辛味エキス】

## 第六章 原子力に想う

### ■原子力船むつ

時間は前後してしまうが、旅が始まって4日目に私たちは青森県むつ市の「むつ科学技術館」に立ち寄った。青森県にはいくつかの原子力関連施設があり、せっかくの機会だから代表的な施設を見学することにした。

ここには「原子力船むつ」の遺産が展示されている。建物はむつをモチーフとして造られており、むつのマスト部分もあって、建物正面には直径4.1m、重さ9.4トンの大きなむつのスクリューが私たちを出迎えてくれる。



【むつ科学技術館の正面】

原子力船むつを知っている人は少ない。私もかすかな記憶が頭の片隅にあるだけで、今回は少し勉強してきた。

むつは原子力観測船として建造が決まり 1969 に進水した。そして 1972 年に原子炉へ核燃料が装荷され、1974 年には出力上昇試験が太平洋上で開始され、初めて臨界に達した。しかし直後の試験航行中に放射線漏れが発生し、マスコミによって大きく報道された。

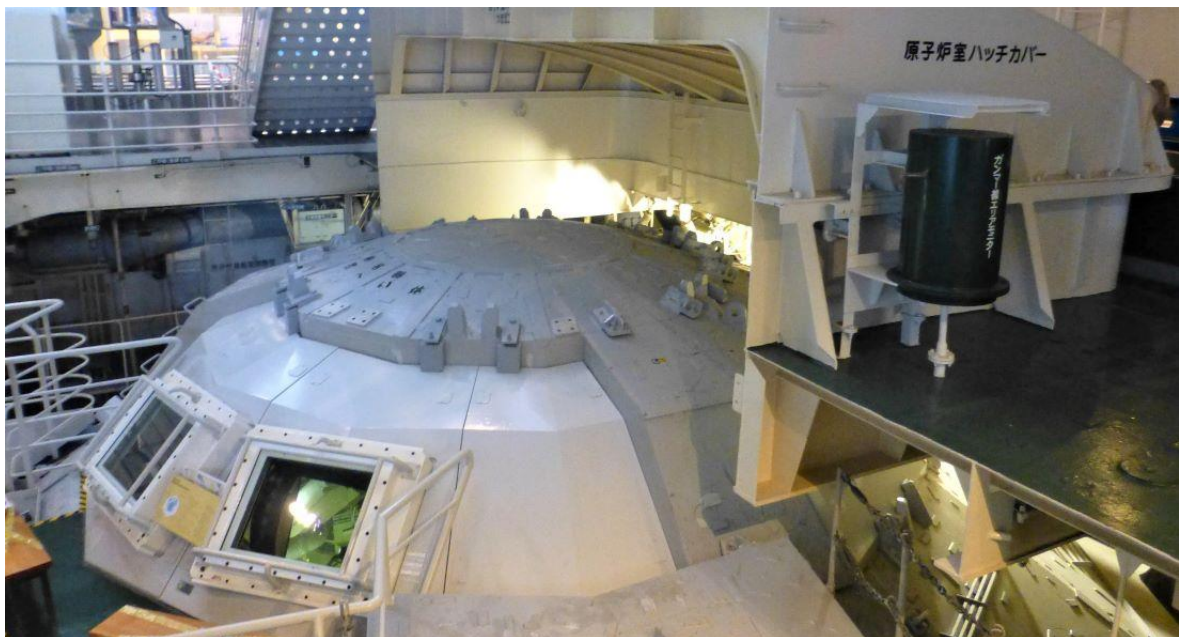
このトラブルで帰港を余儀なくされたが、風評被害を恐れる地元の漁業関係者や市民がむつの帰港を拒否したため洋上に漂流せざるを得なかった。

1975 年、佐世保市長がむつの受け入れを表明し、地元経済界もこれを支持したのは経営不振に陥っていた佐世保重工業に工事を請け負わせることで救済する意図があったためとされる。佐世保で 1980 年から 1982 年に改修工事が行われた。

その後の話し合いで、むつ市の陸奥湾側ではなく下北半島外側（現在のむつ科学技術館のある場所付近）に新たに港を整備することが決定した。1988 年、むつは開港したばかりの関根浜港に入港した。

1990 年、関根浜港岸壁での低出力試験運転、そして試験航海、出力上昇試験を実施して 1992 年にかけて全ての航海を終了した。試験航海は原子力で地球 2 周以上の距離を航行した。1993 年に使用済み核燃料が取り出され、原子炉はむつ科学技術館で展示されている。稼働実績がある原子炉を一般公開しているのは世界唯一で、見学は鉛ガラス越しとなっている。

その稼働していた原子炉を実際に見る。意外に大きく原子炉容器は 5m、格納容器は直径 10m もある。当時の日本の技術者の英知の結晶を見ていることで、かなり感激している自分に気が付く。



【むつの原子炉】

話は全く変わって、長崎新幹線が今年 2022 年 9 月に部分開業した。しかし実はこのニュースは原子力船むつに関係している。

むつが漂流していた際、佐世保市が修理受け入れを表明し、その見返りとして西九州ルートの長崎新幹線の優先着工が決まった。いわゆる密約というやつだ。文書には自由民主党の大平正芳幹事長、中曽根康弘総務会長らが署名し、密約の原本は長崎県庁で保管されている。しかし国鉄分割民営化のためこの計画は頓挫し、そしてさらに悪いことに 1992 年佐世保市を經由しないルートが決定された。そして今年、長崎新幹線は部分開業に至ったが、佐世保市民は複雑な思いでいるのに違いない。

## ■プルサーマル

5 日目に青森県六ヶ所村にやって来た。下北半島の陸奥湾側は横浜町があり、六ヶ所村はその反対側の太平洋側にある。

六ヶ所村には国家石油備蓄基地があり、大きなタンクが数多く並んで置かれている。風力発電のためのたくさんの大きな風車が回っており、すごい数の太陽光発電のソーラーパネルもある。さまざまなエネルギー関連施設が点在していると言っていいだろう。

その六ヶ所村の真ん中あたりに、原子力再処理工場を含む「原子燃料サイクル施設」がある。それらを紹介する「原燃 PR センター」を見学した。日本の原子力発電への取り組みを分かり易く紹介するのがこの施設の役割になっている。

原子力再処理というよりも「プルサーマル」という言葉を耳にしたことがあるという人は多いはずだ。

私のにわか知識で申し訳ないが簡単にプルサーマルを紹介する。

原子力発電の元々の燃料は天然のウランだが、発電を終えた使用済み燃料を再処理するとウランとプルトニウムを取り出すことができる。そのプルトニウムから新しい燃料（MOX 燃料）を作り、再び原子力発電で利用することをプルサーマルと呼ぶ。いわゆる核燃料の再利用のことで、原子力発電所の原子炉（熱中性子炉）は英語でサーマルリアクターと呼び、プルトニウムをサーマルリアクターで再利用するのでプルサーマルという造語が生まれた。

六ヶ所村は核燃料サイクル基地と呼ばれており、プルトニウムを取り出す施設「再処理工場」、それ以外に天然のウランを濃縮する「ウラン濃縮工場」、原子力発電によって発生する低レベル廃棄物を埋める「低レベル放射性廃棄物埋設センター」、再処理によって発生する高レベル放射性廃棄物を一時的に貯蔵する「高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター」がある。

それら原子力関連施設が本州のはずれの下北半島の太平洋側にある。原子力船むつの母港も含めてこの地域に集まったことは決して偶然ではないだろう。原子力は安全だと強調する一方で、人口密度の低い地域に関連施設を作るのは、自信がない証拠なのだろう。

私の友人に原子力発電推進派がいるが、彼は東京湾の夢の島に原子力発電所を作るべきだと以前から主張している。安全だと言い切るならできるはずで、何よりも送電距離が短くなって好都合だ。しかし東日本大震災で状況は一変し、その主張も最近は聞いていない。

## ■日本の原子力は大丈夫か

原燃 PR センターでは原子力発電とプルサーマルについての問題点などにはあまり触れないような説明を行っていたが、ちょっと調べると結構な問題点が出てくる。

まず、六ヶ所村の再処理工場は完成していない。現状は試験運転をしている状態で、安全性や技術的課題によって完成時期が何回も延期されている。最新情報では 2022 年 9 月に 26 回目の延期が発表され新たな完成時期も示されていない。当初は 1997 年に完成する計画だったが、25 年経ってもその目途がたっていないことになる。

従って現状日本の再処理はフランスなどに委託しており、発生した高レベル放射性廃棄物も委託先から一緒に持ち帰っている。そしてその最終処分場は決まっていない。それだけでなく、現在の日本では MOX 燃料も作れないのでこれもフランスに製造委託している。

簡単に言うと見切り発車したまま、放射能のゴミだけが発生し続けている。そのため核兵器の材料になるプルトニウムの日本の保有量は 2019 年末で約 45 トン、核弾頭約 6000 発分に相当する量になっている。このことが世界各国から日本が核武装をするという懸念材料になっている。

費用についても六ヶ所村の施設は 1993 年から建設されており、当初予算は約 7600 億円だったが、稼働が延びて費用もかさみ、2018 年には約 14 兆円と見積もられている。

それらの遅れの根底にある理由は日本の技術が追いついていないということだろう。いや原子力そのものを人類は制御しているとは言い難いのかもしれない。

それに追い打ちをかけたのが東日本大震災で、あの事故によって原子力発電に逆風が吹いたのはいうまでもない。私が特に心配するのは学生が原子力工学を敬遠していることだ。若い優秀な技術者が集まらないので技術的発展は極めて難しい状況にある。

日本の原子力は大丈夫なのか。その答えは残念ながら私には見えてこない。

ノーベル文学賞を受賞した歌手ボブディランの言葉を借りれば「答えは風に吹かれている」となるのだろう。

## 第七章 旅を終えて

### ■全国旅行支援

今回の旅行は幸いにも全国旅行支援の制度が使えて、宿泊費は 4 割引き、1 人最大 5000 円までの恩恵に預かった。この宿泊費割引で全員では約 20 万円の宿泊費が浮いたことになる。

この全国旅行支援は多くの宿で適用してもらえたが、都道府県毎に違っており、青森県は問題なかったが、岩手県はほとんど対応していない。須川高原温泉は 6 人泊まったのに 2 人分しか対応してくれなかった。それでも事前に電話してお願いしていたから 2 人分用意してくれたが、同じ日に泊まった他のお客は恩恵に預かっていなかった。

宿泊割引以外に同制度ではクーポン券が平日で1人3枚(3000円分)が支給される。11日間で合計129枚支給され、それは12万9千円相当になる。

しかしこれが極めて使い勝手が悪い。と言うのは有効期限が宿泊の翌日までで隣県では使えない。宿の夕食時の飲み物に使用できれば良いが、使用できない宿もあり、コンビニやスーパーでは使える店が少ないので、使うのに苦労した。

別に無理して使わなくてもいいのだが、この支援制度は旅行者のためよりも観光地の土産物屋や食堂の支援のためなので使わないとお金が落ちない。結局は道の駅で使うことが多くなって、その結果昼食のおにぎりを買って込むことになり、これがトレッキングの時の弁当になった。

## ■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひよい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。

評価は5段階でその基準は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

今回は最終日の前夜に6人であれこれ言いながら評価した。

黄金崎不老ふ死温泉は泉質4.2、風呂3.6、料理4、コスパ3.2、サービス2.9、建物・部屋2.7、立地環境4.7、総合点3.60になった。

湧出温度52.2℃、pH6.56、泉質は含鉄-ナトリウム-塩化物強塩泉(高張性中性高温泉)になっている。

龍飛旅館は泉質-、風呂2.2、料理2.4、コスパ2.3、サービス1.7、建物・部屋1.7、立地環境3.3、総合点2.26になった。泉質は温泉ではないので評価していない。

大間温泉海峡保養センターは泉質3.2、風呂3.7、料理3.8、コスパ3.6、サービス3.1、建物・部屋3.3、立地環境3.3、総合点3.71になった。

湧出温度48.5℃、pH7.0、泉質はナトリウム-カルシウム塩化物泉(高張性中性高温泉)になっている。

恐山宿坊は泉質3.8、風呂4.2、料理3.3、コスパ2.7、サービス4、建物・部屋4、立地環境4.8、総合点3.82になった。

湧出温度61.5℃、pH2.83、泉質は含む硫黄-ナトリウム-カルシウム塩化物泉(低張性酸性高温泉)になっている。

青荷温泉ランプの宿は泉質4.0、風呂3.8、料理3.6、コスパ3.3、サービス3.6、建物・部屋3.6、立地環境4.3、総合点3.71になった。

湧出温度47.5℃、pH7.75、泉質は単純泉(低張性アルカリ性高温泉)になっている。

酸ヶ湯温泉は泉質 4.3、風呂 4.6、料理 3、コスパ 3.6、サービス 3、建物・部屋 3、立地環境 4.4、総合点 3.70 になった。

湧出温度 57.6℃、pH1.5、泉質は含む鉄、含む硫黄・アルミニウム硫酸塩・塩化物泉（低張性酸性高温泉）になっている。

十和田温泉春山荘は泉質 3、風呂 2.5、料理 4.5、コスパ 5、サービス 5、建物・部屋 3、立地環境 4、総合点 3.86 になった。

湧出温度、pH、泉質は不明になっている。

玉川温泉は泉質 4.8、風呂 4.7、料理 3、コスパ 4.3、サービス 3.1、建物・部屋 3.3、立地環境 4.2、総合点 3.88 になった。

湧出温度 97.3℃、pH1.13、泉質は強酸性高温泉になっている。

乳頭温泉郷蟹場温泉は泉質 4、風呂 4.4、料理 3、コスパ 3.2、サービス 3、建物・部屋 4.3、立地環境 4.7、総合点 3.79 になった。

湧出温度 49.8℃、pH7.51、泉質は単純泉（低張性アルカリ性高温泉）になっている。

夏油温泉の元湯夏油は泉質 4、風呂 3.9、料理 3.2、コスパ 3.2、サービス 2.9、建物・部屋 2.8、立地環境 4.9、総合点 3.63 になった。

湧出温度 62.3℃、pH7.2、泉質はカルシウム・ナトリウム硫酸塩泉（低張性中性高温泉）になっている。

須川高原温泉は泉質 4.7、風呂 4.1、料理 4.3、コスパ 3.9、サービス 4.3、建物・部屋 4.3、立地環境 5、総合点 4.37 になった。

湧出温度 50.5℃、pH2.2、泉質は含む硫黄・鉄・塩化物・硫黄泉、ラドン含有量 093 マツヘ/kg の低張性酸性高温泉になっている。

## ■旅の記録

旅行は 2022 年 10 月 11 日（火）～10 月 22 日（土）の 10 泊 11 日で実施した。関西から 4 人、関東から 3 人の計 7 人の旅の男女 7 人（男性 4 人女性 3 人）の旅になった。途中で女性 1 人が帰宅し、その後は 6 人の旅になった。行程を以下に記す。

- ・1 日目 8 時自宅を出て 9 時 36 分東京駅発の新幹線に乗車、新青森に 12 時 34 分到着、東京組の 3 人が合流、新青森でレンタカーを借り、青森空港にて関西組 4 人と合流「三内丸山遺跡」を見学、「千畳敷海岸」に立ち寄る。（強風で外に出ず）17 時に「黄金崎不老ふ死温泉」到着、強風で海辺の露天風呂入浴できず
- ・2 日目 朝から強風で海辺の露天風呂は入浴できず、宿を 8 時に出発「千畳敷海岸」、「日本一の大銀杏」見物、道の駅で昼食用のパンやリンゴを購入、白神山地「アクアグリービレッジ」到着、約 1 時間「世界遺産の径 ブナ林散策道」を散策し昼食、弘前経由で金木の「斜陽館」に立ち寄る（入館せず）、

国道 339 号線を北上し、「道の駅十三湖高原」の展望台から十三湖眺望、  
竜飛岬を望む「眺瞰台」に立ち寄り、階段国道 339 号線を徒歩で降りる。  
17 時に階段国道 339 号線上側で夕陽鑑賞、龍飛岬郵便局で現金を降ろし、  
17 時 30 分に龍飛旅館到着、18 時 30 分から食事

- ・ 3 日目 8 時に旅館を出て、近くの義経寺を参拝、青森駅前「ねぶたの家 ワ・ラッセ」見学  
夏泊半島先端の「佐々木食堂」でイクラ・生ホタテ丼、イカ焼き、ホタテラーメン、  
ホヤを食し、「陸奥大島」に徒歩で渡る。陸奥湾を回り横浜町、むつ市を經由して  
大間岬に到着、16 時 30 分到大間温泉海峡保養センターにチェックイン
- ・ 4 日目 8 時に宿を出発、「仏ヶ浦展望台」、「仏ヶ浦」、河内ダム経由でむつ市内へ、  
むつ市はやねホテル内の「レストランあすなろ」で昼食、「むつ科学技術館」見学し、  
恐山温泉の「宿坊吉祥閣」に到着、精進料理の夕食後に部屋で飲み会
- ・ 5 日目 6 時 30 分に“朝のおつとめ”で地蔵殿にて諸祈願、本堂にて供養、7 時 30 分朝食、  
9 時に出発し「六ヶ所村原燃 PR センター」、道の駅横浜で昼食用ホタテにぎり等を  
購入、野辺地駅で途中帰宅の 1 人を降ろし、以降は男 4 人女 2 人の旅になる。  
道の駅で昼食、「奥入瀬溪流」に到着、溪流沿いに車窓見学をして十和田湖へ、  
十和田湖から奥入瀬溪流の約半分の地点まで車で行き、5 人はそこから奥入瀬溪流を  
上流に向けて散策、運転手 1 人は十和田湖畔に車を停めて下流に向けて歩く  
他メンバーと合流し駐車場まで歩き、以降は車で移動  
十和田湖南部の標高 583m「瞰湖台」（かんこだい）から十和田湖を眺望  
女性陣を十和田湖畔の「春山荘」で降ろし、男性陣は「ランプの宿青荷温泉」到着
- ・ 6 日目 8 時 30 分に男性陣が宿を出発し、9 時 30 分に女性陣を春山荘でピックアップ、  
春山荘近くの商店で昼食のおにぎりを購入、「大湯環状列石」を見学し、  
「八甲田山ロープウェイ」に着くが 2 時間待ち、その間に昼食を食べて、  
ロープウェイで山頂駅へ、30 分コースを散策、女性陣を「ランプの宿青荷温泉」に  
送り、男性陣は 16 時に「酸ヶ湯温泉」にチェックイン
- ・ 7 日目 8 時 15 分に宿を出発、女性陣と青荷温泉の送迎バスが着く道の駅で合流  
道の駅で昼食のおにぎりを購入し八幡平へ、「八幡平ビジターセンター」立ち寄り  
徒歩で大沼一周し、「八幡平山頂レストハウス」で持ち込みおにぎりとおでんで昼食、  
14 時玉川温泉に到着しチェックイン
- ・ 8 日目 下駄箱の鍵紛失騒動勃発のため 9 時に宿を出発、田沢湖を一周し「たつこ像」を  
見物し、「かたまえ山森林公園」で田沢湖を眺望、「田沢湖共栄パレス」で  
稲庭うどんの昼食、乳頭温泉郷へ向かう。13 時に「鶴の湯温泉」で立ち寄り湯、  
14 時に「蟹場温泉」に到着しチェックイン
- ・ 9 日目 8 時 50 分に宿を出発、「黒湯温泉」に立ち寄り湯、盛岡の「東家」でわんこそば、  
14 時夏油温泉に到着チェックイン
- ・ 10 日目 8 時に宿を出発、平泉の「中尊寺」を参拝、近くのコンビニで昼食を購入し、  
11 時 30 分に「須川高原温泉」に到着、宿にチェックインして、  
栗駒山山頂を目指すも登山道閉鎖で賽の河原と名残ヶ原まで 1 時間 30 分散策、  
途中で昼食を食べて下山、「栗駒山荘」で立ち寄り湯、13 時宿に戻る

- ・ 11 日目 7 時 30 分に宿を出て、青森空港に 11 時 30 分到着、関西組と別れて、新青森駅でレンタカー返却、新青森から帰途の新幹線に乗車

\*\*\*以下、1 日だけ私の 1 人旅\*\*\*

盛岡で下車して盛岡在住の友人と「盛楼閣」で焼肉と冷麺を食べて  
「盛岡グランドホテルアネックス」に宿泊

- ・ 12 日目 盛岡から新幹線に乗って午前中に帰宅

7 人分の費用は総合計で約 80 万円、1 人当りでは 11 日参加者は約 12 万 5 千円、5 日間参加者は約 5 万 7 千円になった。

これには青森までの交通費は入っておらず、参加メンバーは約 1 万円の航空券や JR のジパング倶楽部などを利用して集結したため、概ね 3 万円ほどこの金額にプラスされる。内訳を以下に示す。

- ・ 宿泊費 計 596740 円 ※割引は全国旅行支援で宿泊費の 4 割引き 1 人最大 5000 円引き

|             |                                        |
|-------------|----------------------------------------|
| 黄金崎不老ふ死温泉   | 64854 円 (7 人分 飲み物含む、34360 円割引適用)       |
| 龍飛旅館        | 50100 円 (7 人分 飲み物含む、19600 円割引適用)       |
| 大間温泉海峡保養センタ | 59550 円 (7 人分 飲み物含む、35000 円割引適用)       |
| 恐山宿坊        | 84000 円 (7 人分)                         |
| 青荷温泉ランプの宿   | 38750 円 (4 人分 飲み物含む、19600 円割引適用)       |
| 春山荘         | 9800 円 (2 人分 飲み物含む、3400 円割引適用)         |
| 酸ヶ湯温泉       | 32566 円 (4 人分 飲み物含む、16544 円割引適用)       |
| 青荷温泉ランプの宿   | 15900 円 (2 人分 飲み物含む、9800 円割引適用)        |
| 玉川温泉        | 43300 円 (6 人分 飲み物含む、25200 円割引適用)       |
| 乳頭温泉郷 蟹場温泉  | 53620 円 (6 人分 飲み物含む、30000 円割引適用)       |
| 夏油温泉 元湯夏油   | 76580 円 (6 人分 飲み物含む)                   |
| 須川高原温泉      | 67720 円 (6 人分 飲み物含む、10000 円割引適用 2 人のみ) |

- ・ 交通費 計 155920 円

|            |                                  |
|------------|----------------------------------|
| レンタカー      | 105270 円 (ステップワゴン 11 日間 保険等全て加入) |
| 高速道路       | 11090 円                          |
| ガソリン代      | 26990 円 (168.9L 平均燃費 11.9km/L)   |
| 駐車場など      | 1320 円                           |
| 八甲田山ロープウェイ | 11250 円 (6 人分)                   |

- ・ 主な昼食、酒つまみと軽食など 計 49110 円

|              |                                     |
|--------------|-------------------------------------|
| 佐々木食堂 (夏泊半島) | 13200 円 (7 人分 イクラホタテ丼、ホヤ、ホタテ塩ラーメン等) |
| レストランあすなろ    | 8710 円 (7 人分)                       |
| 稲庭うどん        | 7260 円 (6 人分 ビール含む)                 |
| わんこそば        | 19940 円 (6 人分 日本酒含む)                |

- ・ 入場料、立ち寄り湯など 計 22850 円

|      |               |
|------|---------------|
| 白神山地 | 3500 円 (7 人分) |
|------|---------------|

- |             |                                            |
|-------------|--------------------------------------------|
| ねぶたの家ワ・ラッセ  | 3850 円 (7 人分 1 人 550 円 本来は 620 円だが JAF 割引) |
| むつ科学技術館     | 0 円 (本来は 300 円のところ 65 才以上で無料)              |
| 恐山          | 3500 円 (7 人分 宿坊に泊まるためには必須)                 |
| 乳頭温泉郷 鶴の湯温泉 | 3600 円 (6 人分)                              |
| 乳頭温泉郷 黒湯温泉  | 3600 円 (6 人分)                              |
| 中尊寺金色堂      | 4800 円 (6 人分)                              |
- ・ 宿の夕食時の飲み物、持ち込み酒類、つまみ、昼食など計約 100000 円
  - ・ 全国旅行支援で支給されたクーポン券 129 枚が上記各項目に充当されるため 129000 円安くなる。また全国旅行支援の宿泊費割引 (4 割引き 1 人最大 5 千円) 203504 円は宿泊費に反映済み
  - ・ 自宅から新青森まで往復費用約 3 万円 (新幹線往復 ジパング倶楽部の 3 割引き適用)
  - ・ 11 日目以降の 1 人旅は飲食代は友人持ち、ホテル代のみ 4400 円 (朝食付き、特別料金)

今回は現地支払い費用が相当な額になるので、高額の現金を持ち歩かないように事前にメンバーから 15 万円を私の口座に振り込んでもらった。それを郵便局の口座に移して旅行先で引き出して使った。郵便局は日本各地、山奥や離島にも必ずあるから、お勧めの方法だ。